



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第927回

教育が衰亡日本を救う

桜 R7/9/19

パネリスト：

あんどう裕（参議院議員）

掛谷英紀（筑波大学システム情報系准教授）

近藤倫子（著述家・発達心理学研究者）

下村博文（元文部科学大臣・前衆議院議員）

高橋史朗（麗澤大学特別教授・モラロジー道德教育財団道德科学研究所教授）

茂木誠（作家・予備校講師）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「今晚は（礼）」

水島「闘論！倒論！討論！2025第927回目の討論です。今日は教育問題について、皆さんと議論したいと思います。題して『教育が衰亡日本を救う』かというクエスチョンを入れたいぐらいですけれども、こういった教育の問題、根本は、やっぱり教育じゃないのかと。戦後80年、昭和100年、こういう時代の中であって、もう一度、我々の国の教育問題を真面目に話し合ってみたいということで、今日は、その専門的な見識をお持ちの方をお招きしましたので、ご出席の皆さんをご紹介しますと思います。

まず、麗澤大学特別教授、モラロジー道德研究財団道德科学研究所、教授の高橋史朗さんです。宜しくお願いします」

高橋「宜しくお願いします」

水島「元文部科学大臣、前衆議院議員の下村博文さんです。宜しくお願いします」

下村「はい。宜しくお願い致します」

水島「作家で予備校講師の茂木誠さんです。宜しくお願いします」

茂木「はい。宜しくお願いします」

水島「参議院議員で参政党の幹事長兼政務調査会長になっています、あんどう裕さんです。宜しくお願いします」

あんどう「宜しくお願いします」

水島「筑波大学システム情報系准教授の掛谷英紀さんです。宜しくお願いします」

掛谷「お願いします」

水島「そして著述家で発達心理学の研究者の近藤倫子さんがお出でになる予定ですけど、今、遅れていまして、また、その経過も入ると思います。それでは始めたいと思います。皆さんが今、どういう形で日本の教育に於いて、それぞれのお立場で、どんな状態なんだろうという現状認識。そして問題点がどういうことか、まずお話し戴いて、そういうところから議論に入りたいと思います。じゃあ、高橋さんから、いいですか。はい」

高橋「前にもお話をしたことがあるかもしれないですけど、下村先生が中心になっておられたウェルビーイング（Well-being）の自民党の研究会がありまして、その時に鈴木寛という方がPISAの2022年の調査結果について問題提起をされたことがあります」

水島「はい」

高橋「これは縦軸が学校への所属感で、日本はここです。赤く○を付けているところですけど、学校への所属感は比較的高いです。ところが横軸は親からのサポート。家族からのサポートがあるかというので、これは極端に無いと」

水島「うん」

高橋「色んな教育の問題点があると思うんですけど、親との絆とか、そこに一番、本質的な問題があるのではないかと、私は、かねがね、そう思っているんですけど、やはり、この問題にきちっと焦点を当てないと、教育が日本の衰亡を救うことは出来ない」

水島「うん」

高橋「まず家庭教育、親の問題、これをどう考えるかって、中々家庭教育と言うと、直ぐ価値観に介入するののかという批判があるんですけど、そこに踏み込まないと、根本的な解決にはならないということが最初に申し上げたいことです」

水島「もう以前から親学という形でね」

高橋「ええ、はいはい」

水島「親にも教育しなきゃいけないという感じで、お話し為さっていましたが、それでは下村さん、お願いします」

下村「はい。ウェルビーイングについては、あとで触れさせて戴ければ有難いと思うんですが、昨日、私の地元、板橋で二宮金次郎のオペラがあったんです」

水島「うん」

下村「これは非常に画期的で素晴らしいなと思ったんですが、ところが参加者がちょっと少なかったんですけどね。この二宮金次郎、二宮尊徳について、有名な森信三さんっていう教育者がいらっしゃったんですが。森信三さんが1990年代だから今から30年近く前ですけども、2025年、つまり今年ですね、2025年から日本は復活の兆しが出て来るだろうと」

水島「うん」

下村「そして2050年には列強が日本を高く評価する、そういう国になるだろうっていうことを、1990年代に森信三さんが言われているんですね。その精神の根本が、二宮尊徳にあるということが、その本の中で書かれているんですね。昨日、改めて二宮尊徳のオペラを観まして、本来、日本人が持っている姿勢、志、勤勉、実直、真面目さ、そういうものが、二宮金次郎の明治以降近代化の大きな精神的バックボーンになったのではないかと。

特に戦後の80年の中で、それが、ずうっとGHQによって否定されて来て、そして、単なるGHQじゃなくて日本人が自ら、まあ、そういう決して、それは軍国主義とか何とか全然、無いんですけどね。それを否定して来た戦後があったと思うんですが」

水島「うん」

下村「ただ森信三さんの予測とか予言と別に、私は今年8月15日に靖國神社へ行ったんですよ。毎年、行っているんですけども、今年も15万人から20万人ぐらいの人々が来ていたと思うんですが、10年前と違うのは、10年前は、いかにもね、やっぱり右翼の街宣車が靖國神社周辺を結構な騒音をまき散らして、身内が英霊という方は別にして、普通の人が行く空気じゃなかったけれども、今年は本当に若い人が凄く多かったですね」

水島「うん」

下村「そして家族連れが多かったですね。結構、暑かったですけれども2時間から3時間ぐらい、ずうっと参拝まで肅々と、みんなが待っている中でね、日本人の意識が変わって

来たなっていう思いはあるんですね」

水島「うん」

下村「ですから、これまでの教育の延長線上ではなくて、これから本当に変えられるかもしれないラスト・チャンスとして考えて、じゃあ、その教育は何なのかっていうことは、これから議論になって来ると思うんですけども、ある意味では、最悪の日本の意識が低下している、或いは、未来に対して夢も希望も無くなっている中で、もう一度、ここにも『草莽崛起』とありますけれども、一人一人が、この日本に対して誇りと自信を持てるような、そういう転換が出来るかどうかが正に教育だという風に思います」

水島「そうですね。はい。二宮尊徳と言うとね、我々の小さい頃の小学校には、必ず校門の横とか校庭に、薪を背負って本を読んでいる尊徳像っていうのがありましたけどねえ」

下村「ありましたね」

水島「大分、消されたみたいですね」

下村「そうですね」

水島「この80年間でね」

下村「うん」

水島「じゃあ、茂木さん、お願いします」

茂木「はい。教育が成功したか失敗したかというのは、間もなく退陣します石破内閣のメンバーを見れば、大失敗と言わざるを得ないですね。日本の指導者があの面子っていうのは、一体、何なんでしょうかということで、実は学校教員をやっていたこともあるんですけども、ドロップアウトしました（苦笑）。あんなところでは、もうやっていると（苦笑）、それで予備校という水商売に入って、かれこれ40年近くやっているんですけども、ですので今日は元文科大臣の前で大変、恐縮ですけども」

下村「いえいえ」

茂木「日本の文部科学行政は、もう、どうにもならないと思っております、外から変えて行くしか無いという風に考えております。はい。以上です。あっ、それでちょっと一言、この間、漫画を出しまして、学校では教えてくれない現代の戦争。特に大東亜戦争で日本が負けるんですけども、実は、そのことがアジアの独立運動に繋がって行ったっていう話を、多分、漫画では初めてじゃないですかね」

水島「ああ、漫画の形式でね」

茂木「ええ」

水島「はい」

茂木「占守島の話とか硫黄島の話も書かせて戴きましたので、お子さんに是非、ご紹介下さい」

水島「そうなんですよねえ。本当にねえ、今、せっかく言ってくれたから、こういう話には結構、いいエピソードが沢山ある訳ですよ。本当に物語が伝わっていないですね」

茂木「(頷く)」

水島「この間、実は、番組で小学5年生という、昭和12年ぐらいの小学館から出た古い本を紹介しました。その雑誌で、軍人さん達が自分達の思いを書いた本が付録になっていて、これを皆さんに紹介したんですけど、今の普通の大学生だったら真面に読めないかも分かりませんね」

茂木「うん」

水島「勿論、フリガナが付いているんですよ。でも文章とかこういうのを読めるかどうか疑問ですね。子供用だから無理に易しく書いているけど、だからね、茂木さんの方がよく分かると思うけど、あの時代の学力と今のレベルは大分違うんじゃないかってねえ。どうですか、落ちていますか。何十年、教職に就いてきて…」

茂木「落ちていますね(失笑)」

水島「落ちていますか(苦笑)」

茂木「はい(苦笑)」

水島「はい。これは本当に困ることですね」

茂木「はい(苦笑)」

水島「前に、ゆとり教育の文部官僚の方にも出て貰ったりしたけど、あれで学力が落ちたんじゃないかって言ったら、いや、ゆとり教育を徹底しなかったから駄目だったんですけど。その人は左の方ですけど、私とは仲の良い人ですよ。この番組にも、よく出て貰っているんですけどもね。では、あんどうさん、お願いします」

あんどう「はい。経済討論ではなくて、教育のテーマで呼ばれるのは初めてかもしれませんが、宜しくお願いします。今、茂木さんのおっしゃった、今の指導者が教育の失敗だということですけども、正にアメリカとしては大成功ということじゃないかと思えますねえ。アメリカの教育改革が見事に花開いて、今の指導者層をつくっていると思いますので、正に国が政策として教育を変えると、こうなるんだっていうのが今、非常に解り易い形で表に出て来ているんじゃないのかなあという風に思います。

それと、もう一つ、高橋先生のおっしゃった親との絆ですよ。やはり、これが今、日本では本当に損なわれていて、今、女性の活躍と言って、とにかく子供を生んだら、預けて働きなさいとやっていますから、もう産んで預けて働くということが段々スタンダードになってきてしまっていて、やはり子供を育てながら親も育つと言われますよね。

子供育ては親育てと言われるように、子供を育てながら忍耐力も付けていき、でも、やはり自分を、もう100%信頼してくれる子供という立場が居るから、自分は親として成長していくということが言われていますけれども、今、その環境がどんどん損なわれていて、もう、とにかく預けて働きなさいとなっていますから、それは親と子の絆が薄くなるのは当然で、それこそ子育ては外注するものだという風に思っている親も今、非常に増えていると思うんですよ。

そうすると、子供の自己肯定感というものが損なわれていくと思いますから、当然、それは学力にも表れて来て、まあ、勉強しようというのは、自分が楽しんで、こうやって行こ

うと思って勉強していかなきゃいけないと思いますけれども、中々、そこまで至らないと。

そういう子供も非常に増えているんじゃないかと思いますね。そういう意味では、学校教育だけではなくて、家庭環境を整える為にも、やはり家で子供が安心して暮らせる環境を社会全体でも作っていかなくちゃいけないと思います」

水島「うん」

あんど「そうすると、今の女性活動のことを言うと、うちの党も、よく叱られるんですけど（失笑）、やっぱり男と女は役割が違いますし、男性は子育てでは女性に敵わないので、女性の皆さんも働きたい人は勿論、働いて貰ったらいいけれども、家で子育てに専念したいんだっていう女性の方は、家で子育てが出来る様な経済環境を取り戻して、子供が安心して家に居て、遊んでいていいんだよと。

子供が家で楽しかったねと。今日も一日、楽しく遊べたねっていうところから、親との絆とか自己肯定感というところを、まず養っていく、もう、そこから始まらないと、日本の教育だけ語っていても、もう中々立て直しが出来ないじゃないかなという風に思います」

水島「なるほどね。はい、有難うございます。では掛谷さん、お願いします」

掛谷「はい。あんど先生がアメリカの教育は成功しているとおっしゃいましたが、私は大失敗していて、それが…」

あんど「アメリカの教育が成功したのは、占領政策として成功した」

掛谷「まあまあ、まあ、日本占領政策としては、そうそう、そう。私は以前から、チャーリー・カークの大ファンで、参政党さんが先日、チャーリー・カークを招聘して下さったので、彼が日本に来た時に会場に行きまして話を聞いたんですが、その数日後に暗殺ということで非常に衝撃を受けたんですけれども、そこで、私は、チャーリー・カークの暗殺が、アメリカの大学の教育の敗北と一言で表せると思うんですね。

何故かと言うと、チャーリー・カークは元々ウェストポイントだから士官学校、陸軍士官が志望だったんですけど、上手く入れなくて、ギャップイヤーということで、1年間、色々な活動を試みようと思って始めたのが、あのTurning Point USA (TPUSA) という活動で、ただ、それが軌道に乗って来たので、結局、大学に行かなかったんですね」

水島「うん」

掛谷「彼は何をやったかって言うと、大学の色々なキャンパスに乗り込んで、そのの大学生とか教授とかと論戦する訳ですね。机を置いて、自分に反論する奴は来いと」

水島「うん」

掛谷「それで全部の議論で勝った訳ですよ」

水島「うん」

掛谷「大学の教育は、その議論でチャーリー・カークに勝てる人を育てななくちゃいけないのに、誰一人、勝てなかった訳ですよ」

水島「うん」

掛谷「だから、あとは殺すしか無かったと。それで、その暗殺が成功して喜んでいるアメリカ左翼の教授が沢山、居る訳ですよ。ということで、私は結局、大学教育の敗北。まあ、日本の教育も、ある意味、似たようなもので、日本でも安倍さんが亡くなられたあとで喜んでいる教授が何人か居ましたよね」

水島「うん」

掛谷「アメリカでは、そういう人がクビになったりしていますけど、日本では何もなっていませんよね。そういう意味でも酷い話ですけど」

水島「うん」

掛谷「チャーリー・カークの話は本当にいい話で、私はそれまでもネットに出ている動画を、いつも聞いていたんですけども、彼は反グローバリズムですよ。だから彼は基本的にアメリカ人だからキリスト教の精神に則って、色々やると。だから、今迄、教会に行ったことも無いような人が、今回の暗殺のあと教会に初めて行ったという人が、沢山、居る。初めて、あるいは久しぶりに行ったという人が沢山、居る。そういうアメリカの価値観に回帰している。ただ、彼が日本に来て言ったのは『日本には日本の価値観があるから、別に、それを押し付けるつもりは無い』と。但し、人間って自分よりも上の何かを想定しないと駄目だと」

水島「うん」

掛谷「まあ、アメリカ人としたらキリスト教だし、日本にも何かあるはずで、彼が言っていたのは、例えば日本の町のバスの運転手さんとか、或いは、警察官とかを見ていると、非常に規律正しくDutyっていうか義務感、職務に対する義務感がある。だから、そういう上のものっていうのを想定して生きているという意味で、日本人は素晴らしいと。

だから、そういうことを言っていたんですね。ただ、じゃあ、その日本はそういう具合に見えるっていうのは一つあるんですけども、その日本の悩みって何かと言うと、まあ、日本って今、凄くアメリカの真似をしようとしているので、アメリカが今、やめようとしているDIの女子枠を増やすということを、文科省がやっているんですね。

だから文科省がそれを推進しているから、全ての大学がそれをやろうとしていて、だから、アメリカが失敗したって認めて戻そうとしていることを今、一周遅れでやろうとしているという状況ですけども、日本の弱点って何かと言うと、一般人、例えば運転手さんとか警察官が、じゃあ、自分の上として想定しているものって何かと言うと、世間とか空気ですよ。

それは山本七平が言ったり、或いは、丸山眞男が言ったりしていて、丸山眞男は日本にはそれが無かったので、欧米にはキリスト教があるから、仮に天皇っていうのを置いて、それが上手くいかなかったと言うのが、丸山眞男の評価ですけどね。それは丸山眞男の評価ですけど、ただ今、日本は戦後、皇室に対する敬意も無いし、だから上っていうものは多分、何でも世間の空気っていうところに従うというのは多分、一般人にはあるんですけども、エリートは世間の目を騙せるんですね」

水島「うん」

掛谷「だから、そういう意味では、私はいつも言っているんですけど、日本のエリートは最悪だと、だから日本の科学者は世界で一番、嘘つきだと、私はいつも科学者の立場で言っているんですけど、騙せるので、いくらでも嘘をつくんですよ。要するに自分の上が全く無い、欧米の科学者も結構、そういう人が居ますよ」

水島「うん」

掛谷「ただ、やっぱり、そうは言っても、私は、新型コロナウイルスの起源の追求をやって来た訳ですけど、どう考えても塩基配列を見たら、人工に見えるって言った時に、日本の科学者は多分、判る人が1万人以上居たのに、1人もそれを口に出せないんですよ。だから真偽に対する尊重っていうものが、やっぱり日本の科学者で持っている人は、ほぼ居ないと。」

欧米では確かに圧力に負けた人は沢山、居ますけど、声を挙げた科学者って、実は結構、居た訳です。実際、議会でも、それこそランド・ポール (Randal Howard "Rand" Paul) 上院議員だとか、ウェンストラップ (Brad Robert Wenstrup)、もう引退しましたが下院議員とか、あと、マーシャル (Roger Wayne Marshall) 上院議員とか、そういう人達が議会でファウチを追求しましたよね」

水島「うん」

掛谷「そういう人材が居る訳ですよ。日本には当然、政治家にも居ないし、科学者にも居ないし、だから、要するにエリート層を縛るその上の何かっていうものが、日本人には欠けているという問題をどうすればいいのかなあというのを (失笑)、まあ、だから、今、そこですよ。」

やっぱりチャーリー・カークにとって、キリスト教というのは、その上であると同時に、実はキリストってロールモデルでもあるんですよ。だから、社会、世の中の為に自分の命を犠牲にする。正にチャーリー・カークはそうなった訳ですけど、さっき二宮尊徳の話が出てきましたけど、日本は、そのロールモデルも、色々伝えて作っていかなくちゃいけない。二宮尊徳は、その例ですし、戦前の国語の教科書とかを読むと、結構、そういうロールモデルが沢山、出て来るんですよ。これは国語の教科書ですけど、久田佐助とか…」

水島「偉人伝みたいなね」

掛谷「そうそう、そうなんです」

水島「そういう物語がきちっと書かれてますよね」

掛谷「結構、偉人伝的です。濱口陵梧とか、そういう自己犠牲で人の為に尽くすっていう話は結構、国語の教科書なんかに出て来るんですよ。だから、日本の課題って、一般の人は、やっぱり世間とか空気の目で凄く規律を正しく生きてると、チャーリー・カークの目にも見えるんだけど、エリート層、アメリカだったら多分、政治家でも特に共和党の議員はキリスト教という自分の上っていうものを持って政治していますけど、日本はエリート層がそんなに自分の上っていうものがハッキリしていない。」

だから凄くアメリカのそういう非常に優秀な議員とか、或いは、芸能人に相当する人が出て来ない。この問題をどうすればいいかっていうのが、今の日本の課題じゃないかなと思っています」

水島「そうですね。丁度、そのカークさんっていう暗殺された人が今、色々扱われている中で、彼は福音派の信者ですね。実は、昨日、チャンネル桜では、ずうっと特集を組んでいたんですよ」

掛谷「はい」

水島「そうすると、日本の教育とか戦後の教育にも非常に関わる問題があつて、例えば我々の国が今年までに1億1千万ぐらいの水子さんが居ると。戦後80年で。1億人とか1億1千万とか、物凄い数が居る。日本の人口と同じぐらい水子が居る。これが少子化かという言い方がある。

それと、もう一つ、例えばカークさんが今、持ち上げられているから、あまり言うとは凄く反発が来るのは解るんだけど、じゃあ、これを日本の水子の問題で考えると、彼は、ちょっと変な話だけど、赤ちゃんの頭が母体から出て、身体が未だ母体に残っている状態でも女性は嫌だったら、その赤ちゃんを殺してもいいと、殺すっていうか、それが墮胎だと思われているっていうのを主張する訳ですね。

それから、これも色々な考え方があるんですけど、レイプ犯に無理に妊娠させられた時、それでも産むべきだと。或いは、もっと言うと、色々なことで、最近、出ているけれど、親から、そういう性的な強姦を受けて妊娠しても産むべきだ。これは彼の福音派的な考え方だね、それから、これも言うておこなきゃいけないんですけど、彼は、黒人が機長の飛行機に乗るのは嫌だっていうね」

掛谷「あ、それは切り取りですよ」

水島「切り取り？」

掛谷「基本的にチャーリー・カークは、それこそアメリカの黒人の人達をトランプに会わせたりとか、そういうのを援助したりということを凄くした人ですね。それは、どういう文脈かと言うと、所謂、D Iで全ての人種を割り当てて、全然、能力が無いのに下駄を履かされたような人達、女性とか黒人がパイロットの飛行機には乗りたくないって言ったのであって、それは切り取りです。はい」

水島「うん。まあ、そういうね、今、言ったように、そういう枠を切り取りってね、まあ、そういうものも出ているという話を含めてね」

掛谷「はい」

水島「やっぱり福音派的な色々な要素、そして、もう一つは、タッカー・カールソンとか色んなところに伝わっていますけど、スコット・リッター (William Scott Ritter, Jr.) とかね、こういう人達によると、やっぱり最後の殺される直前は、イスラエルのガザ地区の虐殺というものに対して、極めて批判的だった」

掛谷「はい」

水島「新たな資金提供も断つたと。イスラエルからもずうっと援助を貰っていたし、一番のイスラエル鼯の人だったのが今、そういう状態になった時、暗殺されたとかね。まあ、本当に複雑なもの、あと、もう一つは家族論ですよ」

掛谷「はい」

水島「福音派の家族論ってというのは、普通のオーソドックスなキリスト教とは違う、やっぱり、まずイスラエルを優先する。それで終末論っていうものをね、これだけイスラエルを第一と認めるってというのは珍しいっていうか、アメリカではトランプの最大の支持層ですけれども、敢えて反発あることを言って、事実だけを言っておかなきゃいけないんでね。

福音派というのは、そういう宗派で、それがトランプの最大の支持層であると。それと、もう一つは、イスラエルの支持をしながら、逆にガザの問題については齟齬が生まれたというね、こういうようなことも含めて、掛谷さんも違うと言ってくれた、アメリカの家族論。アメリカの教育と戦後の教育とね、占領軍教育とは違うんだけれども、私は昭和24年生まれですけど、我が家は町内で二番目に早くテレビを入れたんですけど、アメリカのファミリードラマや西部劇や戦争映画ばかりだったですよ。ほんとにビックリするぐらい。

『パパは何でも知っている』とか、物分かりのいいパパが出て来てというようなドラマで、そういうのが本当に摺り込まれた思いがあるので、こういうアメリカの家族論、もつとえば、子育て論でスポック博士ですね。あれは本当に一時、流行ったんですよ」

高橋「(頷く)」

水島「こういうようなものを含めて、パン食に替えるとかね。基本的に、日本人の在り方を根本的に変える政策をずうっとやって、教育の中にも、そういう影響が相当、ずうっとあったんじゃないか。さっき、あんどうさんが言った、いい意味じゃなくて大成功したっていうところがあって、その現実を見ておかないと拙いかなあというねえ」

掛谷「だからチャーリー・カークは、この前の講演で、日本は日本のやり方にすべきだと。神谷さんが、日本はどうすべきなのかというような質問をした時に、それは私が言うべきことじゃないと。それは日本人が考えるべきことだっておっしゃっていました。

だから、みんなが、そうやって一緒になると結局、全部混ぜちゃえば、ヘドロになっちゃうと。それぞれの国が、それぞれの文化を維持する事が大事なのであって、それは日本人が考えるべきことだと。結局、戦後、特に占領政策した人っていうのは、どちらかと言うと、アメリカの民主党系の人ですよ。だから、私は共和党系とは、ある程度、違うと思っていて、確かに戦後占領政策は、そういうグローバリスト的と言うか、日本をアメリカナイズするという部分もあったと思います」

水島「うん」

掛谷「チャーリー・カークに関しては、今回の暗殺事件があるまで、大方の日本人は今回の暗殺事件があるまで、或いは、参政党さんが講演会に呼ぶまで、チャーリー・カークのことを知らなかった人が殆どじゃないですか。私は7~8年前から、ずうっとYouTubeで観ていますから(笑)、だから、そういう意味で言うと、彼は凄く切り取られて誤解されている部分もあるなあと。福音派っていう話で言うと、確かに日本人にとってキリスト教は警戒すべきところは沢山あるというのは、私も同意見です。

最初の収録が始まる前に、茂木先生と話したのは、この前、チャーリー・カークがジョーダン・ピーターソン(Jordan Bernt Peterson)というカナダの大学の先生で心理学者ですけど、4か月ぐらい前、彼が亡くなる前に対談をしていた動画を観ました。最近、追悼も

含めて結構、彼の動画を観ているんです。日本でも学校で反日教育をやっていますけども、その動画で言っていたのは、とにかくアメリカでも今、反米教育をやっていると言うんですよ」

水島「そうですね」

掛谷「うん。アメリカ人とか白人が悪い事をしたと。奴隷を使って酷い事をしたと。だからアメリカのファウンディング・ファーザー達もそういう奴隷を持っていたということをやっている訳ですよ。その中で、その二人が言っていたのは、だけど奴隷制度を終わらせたのも福音派だと。ウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce) というイギリスの福音派の政治家ですよ。小ピットとケンブリッジで同級生だったみたいですけども、だから、そういうキリスト教、勿論、正の面と負の面があるんだけど、そういう部分はアメリカの大学でも教えないらしいですね」

水島「そうですね」

掛谷「だから奴隷をやめさせたのも、キリスト教の価値観だったっていう話を二人でしてましたね」

水島「うん、まあ、その辺は、ちょっと、また、あとで議論したいと思いますね」

掛谷「はい」

水島「昨日のニュースで共和党の議員が、はっきりと、イスラエルは選ばれた世界の民だと」

掛谷「ああ、共和党系の何方でしたっけ、結構、共和党も色々居ますので (笑)」

水島「いやいや、ところが、それを、みんなで立ち上がって、国務長官まで…」

掛谷「ああ、ピート・ヘグセス (Peter Brian Hegseth) ですか」

水島「とかね」

掛谷「ああ、国務長官はマルコ・アントニオ・ルビオ (Marco Antonio Rubio) か」

水島「やはり、それは見なきゃいけないのと、そういうようなことも含めて、アメリカが今、非常に混乱の状態にあるっていうのを、我々は見ておかないと、さっき言ったカークさんの問題もね、何故、私が敢えて言うかっていうと、もう死んで可哀想で英雄で弁舌にかけたら最高の奴だと。こいつを論破出来る奴は居ないと、一人も居なかったって、本当にその通りだと思う。だけど論破する事と大学の学問、しっかり真理を追究する問題とは違うから、学者をみんな、やり込めてね、所謂、弁論術とは違うということ、はっきり見ておかないと…」

掛谷「ああ、それは、だけど、あれですよ、例えば…」

水島「大事な事だと思っているんだよね」

掛谷「そういう意味で言うと、それこそピーターソンとの対話は、ピーターソンは元々、大学で教えていた人なので、かなり色々先人の色んな哲学者の名前が出てきますけど、チャーリー・カークは全く対等にそういう議論が出来ていますからね」

水島「うん。だから、今言ったね、そこが同じ次元だったのかどうか、つまり政治の問題も、本当に政治の哲学という問題よりも、今の状態で、あんた、じゃあ、この苦しんでいるガザの人達をどう思うんだというような形になると、もう学者がついて行けなくなる。

だから全部、論破されるんですよ。ただ、それで大学とか学問とかね、まあ、掛谷さんが、いつも日本の大学の学者の問題を色々言ってくれているけども、そういうところも含めて教育の問題がね、つまり人と議論をするっていうのは人を説得して、或いは論破してどっちが勝ったかっていう傾向が今、凄く強いじゃないですか」

掛谷「う～ん」

水島「だから、そういうものとして、本当に学問とか学校とかね、教育っていうのがあるかっていうのを、まあ、敢えてね、今、カークさんの話が出たのでね」

掛谷「はい。だけど…」

水島「これは、この間、伊藤貫さんと議論した時、その問題が凄くあるというね。本来的な真理って何だと。それと、もう一つ言うと、二宮尊徳のブントという問題。考え方とか生き方とは、ちょっと違うところがあるので、その辺も、アメリカの問題を出すなら、教育の問題もね、しっかり話したいなと思っているのでね、アメリカ自体も今、混乱に陥っているっていうことを含めて」

掛谷「だから、そのジョーダン・ピーターソンとか、或いはビクター・ディビッド・サンソンさんとか、どちらかと言うと、そういう大学でも教鞭を執っていて、そういう哲学的、思想的な背景を基に喋る人っていうのも沢山、居るんですよ。

ただ逆に言うと、日本に居ますかっていう状況が今、あって、だから私は本当に今、色々な勉強をしようと思った時に、言葉で話されているものっていうのが、日本語ではなくて、やっぱり、どうしても、そういうアメリカの人達が話している事にどんどん、どんどん、寄って行って、だから、私はチャーリー・カークとか、或いは、ベン・シャピーロ (Benjamin Aaron Shapiro) とかジョーダン・ピーターソンを普段、見ているのは、そういう人達からしかオーラルに思想とか哲学っていうものを学べない、まあ、日本語だと、茂木先生から時々動画で勉強させて載っていますけど、日本で、そういうことを語れる人が本当に少ないっていう状況があって…」

水島「そうですね」

掛谷「アメリカでは結構、そういう人が居ますよ。日本で知られていないだけで、うん」

水島「いや、丁度ね、やたらジョン・ミアシャイマー (John Joseph Mearsheimer) とか」

掛谷「はい。ミアシャイマー」

水島「あとサミュエル・P・ハンティントン (Samuel Phillips Huntington) とか」

掛谷「はい。ハンティントン、そうですね、素晴らしいですね、はい」

水島「ジョージ・ケナン (George Frost Kenna) とかね」

掛谷「はいはい」

水島「こういう人達は完全に主流じゃなくて、非情に扱われているっていうね」

掛谷「うん…」

水島「あ、さっき、ちょっと間違えました。正しいのを言うておきます。私が言ったのは下院議員じゃなくてイスラエルのアメリカ大使です」

掛谷「ああ。はいはい」

水島「マイク・ハッカビーの発言。『ユダヤ人は選ばれた民であり、全ての道徳の基盤である』と、これを、会議の中で言った。米国の駐イスラエル大使、マイク・ハッカビー（Michael Dale “Mike” Huckabee）がユダヤ人は神に選ばれた民であり、全ての道徳の基盤である。ネタニヤフ、国務長官マルコ・ルビオらが総立ちで拍手喝采というようなニュースが入っているという、こういうものを、私は、いいんじゃないのと、それと、やっぱり殺されたカークさんのことも思ってしまうというね、あのう…」

掛谷「ただ、アメリカの保守系で言うと、キャンディス・オーウェンズ（Candace Amber Owens Farmer）という黒人女性の保守派の方で、あの人もイスラエルが大嫌いで、だから結構、キャンディス・オーウェンズとチャーリー・カークは凄く仲が良く、今回の暗殺も、そういうイスラエル暗殺首謀説は、私は物証からして、今回はあり得ないかなと思っ
ているんですけど、ただキャンディス・オーウェンズは、そうじゃないかって言っていますよね」

水島「うん」

掛谷「はい。だから共和党系でも、そういう反イスラエルの人は結構、居ますよ」

水島「まあ、今、スコット・リッター（William Scott Ritter, Jr.）とか、さっき言った人達はね、私もMAGA支持者でしたから。それから、あの殺人現場は今、整地しちゃった。1週間も経たない内に、建物も壊して全部、整地で今、更地になっちゃったんですよ」

掛谷「大学が、ですか。えっ今回のユタ大学ですか」

水島「え、ああ、そうそう、そう」

掛谷「えー、ほんとですか。ちょっと、それは確認した方がいい」

水島「これは、もうニュースで、ちょっと、今、手元に無いんですけど…」

掛谷「いや、ただ何か、結構、その話、武漢ウィルス研究所の時も更地になったっていうデマが流れたことがあったので、ちょっと…」

水島「これは確認して下さい」

掛谷「ああ、そうですか」

茂木「話を教育に戻しましょう」

掛谷「ああ、そうですね。すみません。どうも、はい」

水島「戻しますね。ただ、こういう問題で言うと、我々の戦後の教育の出発が、アメリカ

の占領政策から始まっていたということを、せっかく言ってくれたので、一応、問題提起をしておきますね。はい」

茂木「じゃあ、せっくなのでチャーリー・カークについて」

水島「うん」

茂木「今、チャーリー・カークの大学での対話集会の動画が、いっぱい上がっています。YouTubeに字幕もついているので是非、皆さん、観て下さい。所謂、論破じゃないですよ、ひろゆきの的なのは違って…」

掛谷「うん、そうそう、そうそう」

茂木「学生が、があ〜っと言って来る。それに淡々と答えて、だけど、こうだよねと」

水島「そうですね」

茂木「これは、どう思う？それで相手が詰まると、有難うと言って、変わるんですよ。だから、僕は、あれを観て、ああ、これが教養だと思ったんです。これが教育」

掛谷「うん」

茂木「そういう対話集会を、銃弾で止めちゃうという」

水島「止めちゃったんだよね」

茂木「うん」

水島「彼は凄く落ち着いていますからね」

茂木「だから、これは教育に対する殺人ですよ」

掛谷「私も全く同意見です、はい」

水島「それは全くその通りで、あの様子を見ると、まあ全部は見ていないけれども一部を見ると、非常に落ち着いて冷静に、どう来たら、どう出るっていう答がちゃんと出せる様なね、そういう優秀な男ですよ。それが殺されたっていうことですけど」

茂木「それで多分、ソクラテスも同じことをやったと思うんですよ」

掛谷「ああ、ああああ」

水島「そうですね」

茂木「広場で」

水島「だから一種の対話ですよ」

茂木「そう。そして彼も殺されます」

水島「議論でワァワァやるんじゃないくて」

茂木「そう」

水島「今言ったように、対話の中で納得させるっていうね。ただ非常に、そういう意味では、相手は全部、論破されているんですよ。はい。では、ちょっと遅れましたけれども、新たにお出で戴きました近藤さんを紹介したいと思います」

近藤「今晚は。宜しくお願い致します」

水島「著述家で発達心理学の研究者であります近藤倫子さんです」

近藤「はい。宜しくお願い致します」

水島「宜しく申し上げます。今、一応、皆さんに、それぞれ、今の教育の問題点や、どう感じているか、どう考えているかっていうのを簡単にお話戴いたので、まず、そこから」

近藤「あ、はい。教育というのは、世間一般的に教えて育てるという風な解釈をされていると思うんですが、私は教えを育むのが教育だと思っているんですね。そうしますと、今、論破とか対話というお話が出ましたけれども、論破って恐らく、ここ10年以内に流行った言葉だと思うんですね。論じて相手を破、破壊の破ですね」

水島「そうですね、うん」

近藤「だから、これって、ある意味、力を持って現状変更することに非常に近い考え方だと私は思っているんですね。だから、結局、私も今（苦笑）色々なことに巻き込まれているんですけども、私に対しても直ぐ『はい、お前、論破』と言って来るんですね。要は、こっちが何を言おうかなあ、こういう風に、私の場合も対話を凄く重視している訳ですけども、相手にこのように言ったら理解して貰えるんじゃないかなあと考えている時間っていうものも『はい、お前、言い返せないから論破だ』っていう風に抑え込んで来るんですね。

これって、やはり暴力で相手を抑えるであるとか、また非常に大きな視点になりますけれども、ロシアがウクライナに対してやっていることも、細かく見て行けば色々な事情や理由があると思うんですけども、力で相手を破壊するっていうことに於いては、論破も同じ手法だと、私は思っているんですね。

チャーリー・カークさんの対話の動画は、ここ2～3日で凄く沢山、上がっているので、私も観ていますが、おっしゃる通り、あれこそ正に教育。カークさんは相手の学生に対して、こういう考えがあるんだよ、こういう風な真理、問題っていうのが根底にあるんだっていうことを、学生の心に育んでいる訳ですね。日本では戦前、そういうことをやっていたという風に感じています。

先程、掛谷先生が出して下さった本を、私も子供の躰という本で解説を書いているんですけども、その躰というのも、2000年に児童虐待防止法が日本で復活してから、本来の『躰』って身に美しいと書きますから、お行儀であるとか所作とか、言葉遣いであるとか、そういった自分の身を正しく美しくして、皆さんと協調して平和な世の中をつかっていく為に家庭の中で育む教えだと思っていたんですが、これが今、世間一般的には虐待、体罰という風な印象操作をされて来ていますね。

だから、そうではないんだということを、もう一度、まあ、2000年近く日本が日本人として培ってきた価値観というものが、戦前まで日本には普通に空気のように存在していたものが戦後、私は全てがGHQのせいだとは言いません。それを受けて行ってきた日本人

もおりますからね。そういうことをやってきた80年の結果が今だというふうに思っていますし、これは、もっと続くと思うんですね。

ですので、その戦前にあった日本の教育、教えを育む。チャーリー・カークさんのように対話をしていくことが大事だということを、もう一度、思い出す。論破、力で相手をねじ伏せることが大切なんじゃないんだっていうことですね。じゃあ、これを何処で教えるのかと言うと、学校ではもう無理だと思っているんですね。学校の先生達も聖職であるということをおぼれたというか、考えていない、まあ、サラリーマン的なお給料を得る為の手段として教師になっている。

特に小学校の先生とかがいっぱいいますので、じゃあ、そういったことを子供達にどうやって育てていくのかと言った時、私は家庭だと思っているんですね。私は母親ですので、そういったことを念頭に置いて子供を育てていくことが大切だと思っています。子育てというのは、ご飯を食べさせて身体を大きくすることや、他の子供達と遜色ない服装をさせて学校へ通わせて、塾へ行かせたり習い事、スポーツとかをさせたり、他の子供達と同じか、もしくは秀でることが子育てじゃないんですね。

子供の心に日本人としての価値観であるとか、教え、さっき掛谷先生がおっしゃっていましたが、エリートを縛る価値観とおっしゃっていましたが、じゃあ、何が自分達にとって、大切な規範、ロールモデルなのかっていうことを子供の心に育てていくこと、そして立派な日本人に育てることが子育てだという風に私は考えていますので、子育てとはそういった原点と言っていると思うんですね。

それで、皆さん、お母さんから生まれてきていますね。あんど先生もお父さんから生まれて来た訳じゃありませんね。皆さん、そうですね。母親から生まれて来た。そして、かつては、お母さんがおうちの中で、しっかり家事をするとか子育てをしていた訳なので、少なくとも今、ここに居る7人はお母さんから、しっかり育てられて来た訳です。

今の子供達は別だと思えます。共働きが多いので、養育者という呼び名でお爺ちゃん、お婆ちゃんであったり、保育園の先生だったり、習い事の先生とか色々な大人が関わっていますが、少なくとも今、ここに居る7人はお母さん達からちゃんと育てられて来た訳ですね。

ですので、まず、そのお母さんを、どうしていくのかと考えるといけないと思うんですよ。今の若いお母さん達は、そのロールモデル、自分達は何を規範にして、これから生きて行くのかっていうことが判っていませんから」

水島「うん」

近藤「ですので、そういった原点に目を向けて、今の社会の空気を変えて行かなければいけないと思っています。それが児童福祉の理念にもありますが、子供の最善の利益だと思っています。

さっき掛谷先生のお話の中で非常に気になることがあったんですが、学者、先生達の間では日本の中でもアメリカの言葉で会話をしていけないと、成り立たないということをおっしゃっていたと思うんですが、私の記憶違いかどうか分からないですけど、言葉で伝えていくのにね…」

掛谷「はい。いや、まあ、私が言いたかったことは、今、日本の知識人が（笑）、思想とか

哲学でレベルがとても高い議論が、アメリカの、例えばジョーダン・ピーターソンみたいな人と同じぐらいのレベルで議論できる人が居ないという問題ですね」

近藤「ああ、はいはい。それで、ちょっと浮かんだのが、例えば、今、私が言ったような子供を中心に考えて行こうっていう話をする時に、私自身も、やはりアメリカの発達心理学者のE. H. エリクソンのライフサイクル理論とか、イギリスの小児科医、心理学者であった、ジョン・ボールのアタッチメント理論とかを出さないと通じない部分があるんですね。

そもそも、これが、おかしいと思っていて、日本人として日本人の感覚で、日本の子供をこうやって育てて行こうよ、こういう風に育てることがいいんだよって言う時は、ちゃんと日本人が日本語として、日本の感覚として話していかなくちゃいけないという風に思うんですが、どうしても心理学であったりとか、欧米発の学問を引いて話していかないといけないということも、非常に間違っているとまで言うと語弊があるかもしれませんが、そういう違和感を抱く部分ですので、掛谷先生のお話は非常に納得します」

掛谷「ただ、これ、そうなっちゃうのは、日本人って日本人同士で、あまり理詰めで話すと敬遠されちゃうんですね」

近藤「ああ、そうです」

水島「そういうところがあるよね」

掛谷「だから日本人同士で話す時は、やっぱり雰囲気と言うか、空気で、ただ外国と話す時は理屈が必要なので、自分達が、そうやって日本でやっている事を外国人に伝える時は論理で伝えないと駄目なので、だから日本人は多分、その両面を持ち続けるっていうことが大事なんだと思うんですよ」

近藤「そうですね」

掛谷「ただ、今はそっちの論理側で、それを説明するっていうことが、国際的な場に出て行かないと、そういうチャンスが中々無いので、だから安倍さんは、それが出来ていた人なんじゃないかなと思うんですけど、だから、日本人同士のコミュニケーションの仕方と、当然、アメリカは多民族国家だからアメリカの国の中でも論理で話さなくちゃ駄目だから、だからチャーリー・カークみたいな人が出て来る訳だけれども…」

近藤「ああ、そうですね」

掛谷「だから日本って、そういう意味でのバイリンガルも必要ですね。日本人が、そういう、かつてあった、結構、タフな能力が求められるとハンディがあるっていう部分もあるんだと思いますねえ、はい」

水島「はい。今言ったように海外のね、GHQの影響があったから、そういうのがあったと思いますけど、今日、本当は、そういう話をして貰って、本来の日本の教育の在り方、もっと言えば家族の在り方とか社会の在り方とか、こういった人間、女も男も、みんな、本当に寂しくなっている。日本人が今、独りぼっちになってバラバラにされている。

みんな、淋しいんですよ。老人も寂しいけどもね、女の人も、みんな独りぼっちだ。男の人も、みんな独りぼっちだっていうね。共同性というか、そういうものも殆ど無くなって

いるんじゃないかっていうのは、別の討論で言う人が居たんですね。女は寂しいんですよ。おってね、一生懸命、色々働いている様に見えるけど。というようなことを含めて、家族の在り方、さっき二宮尊徳の話をしてくれましたけど、我々の教育は、実はねえ、誰だったか、えーと、外国の方ですけど、有名な人でね、江戸時代の教育は最高だったって言っているんですよ」

近藤「ああ、日本の教育ですね」

水島「日本の」

近藤「はい、はい」

水島「共同性もあったし、学問、所謂、識字率とかね、こういうのは、余裕さえあれば、みんな、とにかく寺子屋へ送ってね、読み書き、そろばんをやらされた。それから親の手伝いをするのが喜びであるとかね、だから我々の国の、さっき言ったモデルみたいなものが結構、いいものあったんじゃないかということが言われていて」

近藤「そうですね」

水島「だから、前から親学というところがあったと思うんですけども、二宮尊徳の事だって、本当に生き方としてのモデルをちゃんと提示していた。私の出身の掛川っていう所は二宮報徳社っていうかね、大日本報徳社という本部があります」

下村「そうですね」

水島「おふくろも、その会員だったので解るんですけど、今、我々は、そういうモデルを一つも提示できてないですよ。うん」

高橋「だから、よく日本を取り戻すということがテーマになったことが在りますけど、取り戻す日本って何かということが、意外に共有されてないんですよ」

水島「そうですね。はい」

高橋「そうすると、今、戦後80年、終戦80年で、この占領の7年間で歴史認識がすっかり変わっちゃった訳ですよ。私は、いつも終戦の詔書のね、安岡正篤さんが書いた『義命に』というね、『義命』という言葉が削られたと。正義の義に命という字ですね」

水島「はい」

高橋「これは渡辺ミッチーの息子さん、みんなの党の党首だった渡辺喜美さんの議員会館の部屋で、僕、対談したことがあるんですけど、議員会館の彼の部屋に入ったら『義命』と書いてあったんですよ。何ですかと聞いたら、内なる動議の至上命令だというような意味のことをおっしゃったんですね。つまり、安岡正篤は、あの終戦の詔書の原案を創る時に『義命により』という総括をしようとした訳ですよ」

水島「うん」

高橋「つまり戦後は、大東亜戦争じゃなくて太平洋戦争になりましたけど、これは歴史を調べてみると、英語で書かれているので、ブラッドフォード・スミス (Bradford Smith) という War Guild Information Program の陣頭指揮した人が中心になってね、太平洋戦争史っていうのは英語で書かれてあるのを、僕はアメリカで発見しました。その文献は何を参

考にして書いたかっていうのを見ると、平和と戦争というアメリカの国務省が纏めた米国史観がベースになっているんですよ。

勝った国が負けた国を裁いた、その歴史観が太平洋戦争という形で、今日、これを持って来ているんですけど、前にもお見せしたことがあるかもしれませんが、これは、もう殆ど無い『太平洋戦争史』という本です。多分、古本屋で何冊かしか無いでしょうね。これを見ると、ちゃんと書いてあるんですよ。『連合軍総司令部民間情報教育局資料提供』と（笑）」

水島「なるほど」

高橋「はじめに、ちゃんと書いてあるのね。これが敗戦の年の昭和20年12月8日から全ての全国新聞に連載されたんですよ。ここで南京虐殺が強調されたんですね」

水島「うん」

高橋「こんなに日本は酷い事を行ったんだという宣伝戦ですね。それで、もう一つ、ここに持って来たのは、最近、よく長崎とか広島の前爆の事をテレビで取り上げているのですね。これは『長崎の鐘』という永井隆という人が書いた有名な本ですよ。これも最初は、出版が許されなかったんですよ。ところが条件が付いて、ここにある『特別付録』って『マニラの悲劇』という、日本がマニラで、いかに酷い事を行ったかということを書くのとセットが条件で、これを出していいという、まあ、つまり日本人がいかに残虐であったかということを一方向で言いながら、出版を許したという特種事情の中で、僕ら、日本人が持っていた当たり前の歴史認識、或いは、日本的なものですね。

自然な日本人の持っていた自然観とか家族観とか、色んなものがあると思うんですけど、そういうものが全部、封建的という名の下に否定された。私は、War Guild Information Programっていうのを徹底して調べたので、そのことを一番、解っているんです」

水島「はい。はい」

高橋「国民性というのを徹底して研究したんですね。これはOWI、戦時情報局というところは、どうすれば日本人が戦意を失うかと、これを研究した訳です。その中心になったのが最初、ジェフリー・ゴラー（Geoffrey Gorer）というイギリスの文化人類学者で、彼は『日本人の性格構造』という本を書いたのです。その中で何を言ったかということ、トイレット・トレーニングで厳しい躾をしたから、それがトラウマとなって日本人の国民性が集団的神経症になって南京虐殺が起きたんだと。ここまで言っちゃうんですよ」

一同「（失笑）」

高橋「或いはルース・ベネディクト（Ruth Fulton Benedict）、ゴラーのあとを受け継いだのがルース・ベネディクト。まあ、ゴラーが指名したんですけど。それで彼女は『菊と刀』という本を書いた訳です。これは皆さん、ご承知の通りですよ。『菊と刀』の中で、彼女は日本人の国民性は病的な特性があると。特性が病んでいると。そして、本性に根差す軍国主義っていう言葉を使っているんですよ。軍国主義が一時的に起きたんじゃないかと、この軍国主義は日本人の国民性の本質に根差しているんだと」

水島「うん」

高橋「ナチス・ドイツは一時的にナチズムになったから、それを外せば元に戻るけど、日本人はそうじゃないと（失笑）。一時的に軍国主義になったんじゃないで、日本人の国民精神そのものが軍国主義だと。こういうレッテル貼りをしたんですね。もっと驚いたのは、太平洋問題調査会っていうのがあって、これがニューヨークでアメリカの有名な学者達が30人以上集まって宿泊をしながら研究をやって、日本人の国民性についての結論は、もう（失笑）僕は何とも言えなかったですけど、日本人の国民性は、アメリカの不良少年と28項目の共通点があるという結論ですよ。僕は出版の方に詳しく描きましたけど、まあ口が開いてものが言えないという状態で、もう一つは、War Guild Information Programを陣頭指揮したブラッドフォード・スミス（Bradford A. Smith）が、1942年に二つの論文を書いていて、『日本の精神』という論文と、『日本 美と獣』という論文を書いているんですね。これは恐らくベネディクトと関連して来るんです。美と獣っていうのは菊と刀、つまり日本人は美しい感性を持つと同時に残虐な一面がある、二面性があるんだという光と影を、そこで写し出した訳ですね。

それで日本精神は3つの柱だと。神道と皇道っていうのは天皇がどういうことを大事にして来たかと。皇道と武士道、この3つが日本精神で、これを解体するんだと。今日、ここへ来る迄に議員会館でJapan's Holocaustっていう本の まあ、18人で書いたものですけど、次々にその人達、まあ、僕も入ってリレートークをして来たんです。今、中国では次々と映画がつくられています」

水島「そうですね」

高橋「また日本人が危ない目に遭いそうなことになっている。私はスタンフォード大学っていう所に2年間、居たんですけど、そこでフーバー研究所っていう所でエマーソンという方とご一緒だったんです。この人はマッカーサーの政治顧問付補佐官をしていたんですね。彼がアメリカの国務長官に充てた手紙があるんです。まあ、覚書っていうんですが、そこには、こういうことが書いてありました。対日心理作戦の為に、日本人捕虜を利用して内部崩壊を促進するべきだと」

水島「うん」

高橋「それで今、何を言っているかと言うと、今日の議員会館での会でも言って来たんですけど、実は、そのWar Guild Information Programっていうのは単なる過去の話じゃないと。例えば、今、ユネスコの世界の記憶で、中国や韓国を始め8カ国が慰安婦について共同申請した文書がある訳ですよ」

水島「うん」

高橋「日本は、そうじゃないっていうのを出しているから、ユネスコから対話をしなさいという勧告を受けている訳。その時に中国が申請したのは、日本人戦犯捕虜千人の供述書というのを、ユネスコ側から勧められて追加申請したんですよ。その中を、ずう〜と僕も調べていましたら、例えば遠山満の弟子であった永富博道っていう人が供述書の中に出てきて、この供述だけで207ページもある膨大なもので、何故、僕がこれに注目したかと言うと、僕が初めてアメリカで親学の講演をした時に、高校生二人とお母さんがやって来て泣きながら僕に訴えたんですね。

それは何かと思ったら、マグローヒル社（McGraw Hill）という一番、優秀な高校生が学ぶ教科書で自分は学んでいると。そこには慰安婦は天皇からの贈り物と書いてあると。南京

虐殺は30万と書いてあると。試験問題は20万、30万、40万の選択だと。それで、それだけじゃないんだと。二人の日本兵の証言ビデオを見せられるんだと。こんなに酷い事があったということを知られて、それで終わったあと、日系人子弟が、皆からお前ら、恥を知れと言って虐められると。

それで、お母さんが安倍さんに直訴状を渡して欲しいと言って、二人の高校生と来た訳です。この二人の高校生が言うには、これは単なる偶然じゃないんですと。カリフォルニア州の教育委員会のカリキュラムに、これが入っているんですと」

水島「うん」

高橋「学年が上がって先生が替わっても、同じビデオを見せられるんだと。それで、僕は、じゃあ、僕が調べると言って日本に一旦、戻りまして、その老兵のビデオを徹底的に調べて、貴方が観たのはどれかと言って観て貰ったら、この人のビデオだと。

これが永富博道という人ですけど、国士館大学の学生で愛国学生連盟のリーダーかな。で、この人が野坂参三率いる中国八路軍の日本人捕虜洗脳教育の中で変わったと言うか、変えられたと言うか」

水島「うん」

高橋「これがリークの本に多く出ているんですね。どんなことを証言しているかと言うと、まあ、これは、もう読むに堪えないものですけど、所謂、三光作戦という有名な…」

水島「はいはい」

高橋「所謂、焼き殺す、奪いつくす、殺しつくすという三光作戦を2か月も3か月もやったと」

水島「うん」

高橋「それで拷問をして、水攻め、火攻め、焼き尽くして洞窟に全部、入れて焼き殺してしまったと。兵士達が赤ん坊を銃剣で串刺しにして、生きているのを熱湯のたぎる水槽に放り込んだと。或いは、12歳から80歳までの女性達を集団強姦し、性的要求に役立たなくなれば殺したと。首を斬り、餓死させ、生きたまま焼き、その数は200を超える。私は野獣と化して本当に鬼だったというようなことが、ずうっと出て来るんですよ。

それで、この207ページの証言書を、ずう～っと読んでいきましたら、どうも、おかしいということが段々判って来たんですけど、まあ、これで終わりますけど、自分が直接、殺した人は五十何人って書いてあるんです。ところが、それを訂正して61名と赤で書き直しているんです。ところが、その207ページをずうっと読んでみると、殺した記録をずうっと見ていると合計51な訳です」

水島「うん」

高橋「だから書いた元の数もいい加減、杜撰な数だし、これを態々訂正して61と書き直した根拠も全く無い。こんなデタラメなものが、世界の記憶遺産の資料として提出されていて、それが千人分も集まって来ている。こんなことが対話になって議論になったら、必ず出て来るんですよ。

それは蘇智良という上海師範大学の先生が中心ですけど、その人は、田中ユキという人と一緒になって色々な本を書いているんですけど、中国人慰安婦は20万人、全部で慰安婦は全体で40万人、その内30万人は死亡しているという、とんでもないことを書いていて、オックスフォード大出版から出ている本ですけどね、まあ、もう、これでやめますけども、日本は官房長官談話というのを2回出して、首相談話を3回出してと、談話を次々出して来たんですけど、今度も石破さんが80年のねえ…」

水島「言って回っていますね」

高橋「反省の声明を出すとか出さないとか話になりましたけど、もう、そろそろ80年という区切りの時に、もう一回、日本が本来、持っていた美しい国民性があった、美しい心があったと私は思っていますけど、それは一体何であったのかっていうことをもう一回、取り戻す必要がある。その時の一つの鍵は、やっぱり家族という問題」

水島「うん」

高橋「それから親と子の関係という問題」

水島「うん」

高橋「この問題抜きに語れられないのかなあと、そう思っています」

水島「実際、そうですね。これは3週間前ぐらいだったと思いますが一回、チャンネル桜の番組で出したのは、朝まで生テレビで、南京大虐殺なるものの当時、私は海軍として揚子江のおびただしい数の死体処理をしましたと。それから命令で、居る奴は橋の上から、子供であっても放り込んだという証言をして、田原総一郎が、ああ、そうですかあと話を聞いていた。これは私がちゃんと取材しましたから。もうお亡くなりになりましたけど、十何年前にその川口市に居たお爺ちゃんにインタビューして、どうでしたって言って大変でしたねって、ずうっと言っていたんですけど、じゃあ、軍歴を教えてくださいかかって言ったら、調子に乗ってアルバムを持って来て見せてくれたら、彼は昭和13年の5月に呉の海兵団に入っている。ご存じのように12年12月ですから、未だ海軍にも行っていない訳ですよ。南京戦にも全然、参加していない。

その半年後にやっと海軍になって漢口作戦とか、そういう所にはちょっと行ったというようなことで、これ、おかしいじゃないですかと言ったら、これは嘘ですと。田原さんと言われたんじゃないと思います。こういうことを言うと褒められるんですよ。みんな、持ち上げられるんですよ。褒められるんですよ。よく、こんな苦しい話、辛い話をして下さいましたということで、私は特攻隊の生き残りの人達80人ぐらいにインタビューをしたこと言くと、最初はメディアが喜ぶような左っぽい事をガンガン言う訳ですよ。戦争はいけません、何だかとかね、それで段々、こちらの対応が違うし、いや、本当の事実を聞きたいっていうようにもっていくと、2時間ぐらいのインタビューの終わりの頃は、もう、お前は極右かっていうぐらい愛国者になっている。

つまり、これだけ証言と称するものが、戦後になると、みんなが褒めてくれるし、それから反戦兵士の会ですが、実は、この討論の番組にも出て貰ったことがある。それで、つまり人肉を食ったっていう話をする訳ですよ。ところが、その時の場所は新宿のロフトで我々のキャスターと一緒に議論して貰ったんですけど、みんなが驚くから、お爺ちゃんが一生懸命、焚火の傍で、みんなでゲラゲラ笑いながら何か肉を食っているんですよと言っ

てね。

そう言うんだけど、こちらは、そんな話は全然、信じていないから、どうしても飢えた人なら食べるでしょうねえと言って、ああ、食べたんですかって聞くと、いいえ、僕は見ただけです、とかね。もう本当に証言と称するはずのものが、嘘をつく人が多いです。

お爺ちゃん達の話はどんどん変わります。だから、さっき、おっしゃった戦後の雰囲気が変わったら、もっと違う証言をしていたと思います。それからロシアから帰って来た、ロシアって言うかソ連ですけど、それから中共から帰って来た、あの反戦兵士の会。有名な三波春夫さんだって、帰って来た直後は『日本革命、万歳〜っ』で言っていたっていうね、有名な話で、そういうことですから、直ぐ変わりましたけどね。

やっぱりねえ、この証言も今、高橋さんがおっしゃったように一つ一つ、ちゃんとやると、この人は奇跡的にアルバムを出してくれて、自分の軍歴が明らかになったので良かったですけど、こういうのが今、登録されちゃって世界遺産とか何とか、資料になっちゃっているっていうのがねえ。下村さんは現場で大臣を為さって、こういう歴史の認識や教育が、ずうっと行われて来たのはご存じじゃないですか」

下村「うん」

水島「安倍さんの内閣で教育を変えようとしたっていうね」

下村「うん」

水島「あの時、現場では、どうだったんですか」

下村「まあ、今日のテーマが『教育が衰亡日本を救う』ということなので、是非、プラス思考のお話をしたいと思うんですが、ただ高橋先生の話で、ちょっと二つ話をしたいのですが、一つは確かにGHQの影響があったことは事実だしWGIPとかもね。しかし、戦後、もう80年も経っている訳ですから」

水島「まあ、そうですね、それも言います」

下村「それについては、いつまでもGHQの責任ということじゃなくて、日本人に於ける…」

水島「ああ、なるほどね」

下村「日本に於ける問題っていうのがあると思うんですね」

水島「うん」

下村「私は文部科学大臣を経験しましたが、これからドラスティックに本当に大動乱の時代の中で、確かに教育を変えていかなかったら、この衰退する日本を変えることは出来ないということを考えた時に、本当の国に於けるこれからの教育改革というのは、ある意味では文科省じゃなくて、教育改革庁みたいな形でね、もっと幅広く経済の部分とか、それから国際問題を含めて、日本が再生する為の教育に何が必要なかっていうことを、これまでの延長線上でなく議論していかないと、本当の意味での日本の改革にはならないんじゃないかと思っているんですね」

水島「うん」

下村「それで教科書についても、私が大臣の時に道德の教科化とか、それから教科書検定とか相当したんだけど、やっぱり教科書の検定については、文科省にも色んな人が居ますからね。旧来の踏襲の中から逸脱できないという部分があって、本当に中途半端な改革しか出来なかったっていうところが、教科書問題も含めて、或いは、特に歴史観もそうですけれども、それから今のご指摘の部分も含めて、中々変えられないと。

実際、日本の教科書は民間の教科書会社から採択する訳ですけれども、しかし学習指導要領があって、事前に文科省がチェックしますから、ちょっとでも左でも右でも逸脱しているのは認めないということですから、結果的には大して変わらないと。教科書検定なんかもね。

そういう部分が多々あって、それは大臣だからとか政治家がね、それについて中々介入できないと。もし介入したとしたら、それはマスコミ批判のターゲットになりますから」

水島「うんうん」

下村「近隣諸国条項を見直したいというだけで、朝日新聞の社説に大きく書かれたことも何度もありましたからねえ」

水島「はい、ありましたね」

下村「そういうところがあると思いますので、しかし、さっきの話で言うと、戦後80年の中で石破総理が談話を出すかもしれない訳ですけれども、しかし安倍さんの時に戦後70年の総理談話の中で、これについてはもう決着しよう。そして未来志向の中でね、戦争を知らない世代の人達が当時、どんどん8割ぐらいになって来た中で、いつまでも、その責任を負わせるということではなくて、決着をつけようということで、その時に、右からも左からも批判はあったけれども、しかしバランスをとって、戦後の80年談話に繋がらない70年談話で、これについては過去について決着して、これから未来志向で行こうということになった訳ですね」

水島「うん」

下村「しかし石破さんが80年談話で、また、ある意味では蒸し返しをするようなことがある一方で、最近、中国では抗日戦勝利大パレードをしながら、映画も何本も作って、周辺諸国に利用されるようなことを、敢えて日本が未だに続けるようなことがあったとしたら、この国の再生は、あり得ないと思うんですね。ですから戦後80年の中で、これから、いかに脱却できるかが問われている事が一つと」

水島「そうですね」

下村「それから、さっき家庭教育の話が出ていたので、これも15年ぐらい前に、高橋先生に力を貸して貰って、超党派で親学の議連をやったんです」

高橋「親学推進議員連盟ね」

下村「推進議員連盟。でも結果的には直ぐ潰されたんですね」

高橋「はい」

下村「それは発達障害の問題がきっかけではあったけれども…」

高橋「はい」

下村「しかし、そもそも親学なんていうのは、とんでもないと」

高橋「はい」

下村「国が家庭教育に介入するのは、とんでもないという批判がオンパレードで」

高橋「はい」

下村「それで潰されて、そのあともね、しかし、自民党もその時からですから15年ぐらい前から家庭教育の大切さ、家庭の在り方の大切さというものを進めていたんだけど、この5年ぐらい前からは、いや、それは旧統一教会に言われているからだ」と

水島「うん」

下村「旧統一教会が家庭教育を言っているから、自民党は旧統一教会のその要望に沿ってやっているんだみたいに捻じ曲げられて、それも中々議論が出来なくなっているという部分がありますけれども、もう、いい加減、今回、総裁選挙もありますから、本当の意味でのリベラル自民党から保守自民党に替えられるかどうかという、今、丁度、戦後80年の節目でもあるという大切な時だと思いますね」

水島「なるほどね」

下村「うん」

水島「ということは、文部科学大臣になっても、そんな簡単に中々動きが執りにくい状態はずっとあった訳ですね、安倍内閣であつてもね」

下村「そうですねえ」

水島「うん。まあ、これは大事な話でね、一人が頑張れば何とかなるっていうものじゃないっていうね」

下村「うんうん」

水島「そういうところを、やっぱり、みなさんにも知って貰わなきゃいけないしね」

下村「うん、そうですね」

水島「うん。でも何とか80年、さっき、おっしゃったように、GHQのせいになっている訳には行かないっていうのはねえ。これは我々の責任ですもんね」

下村「うん、そうですね」

水島「続いて茂木さんは、どうですか」

茂木「今、高橋先生がご紹介為さった永富博道さんについて、今、調べたんですけども、日本が降伏したあと国民党の閻錫山（えんしゃくざん）の軍隊に入って、中共と戦って、捕虜になりまして、そして、あの有名な撫順（ぶじゅん）戦犯管理所に入りまして」

水島「はいはい」

茂木「すっかり洗脳されて」

水島「ああ、徹底的にね。なるほど」

茂木「それで中帰連ですね、中国帰国者連絡会、そして日中友好協会理事と（失笑）いうことで、もう…」

水島「典型的だね」

茂木「典型的な日中友好派ですよ」

高橋「筋金入りが転向したっていうかね」

茂木「筋金入りが」

高橋「はい、はいはい。それぐらい強烈な戦略エージェントってことですね」

水島「いやあ、茂木さん、丁度、本田勝一が中国の旅ってね、悪い事をやっている奴が延々出て来るじゃないですか」

茂木「ええええ。そうですね」

水島「ね。日本へ、こんな悪い事をやったっていうのがね。あれと同じパターンが今ね、ずうっと続いているんだね」

茂木「う～ん。うんうん」

水島「茂木さん、こういう今、嫌になったっていうのは、もう、とても耐えられなくなっただっていう表現まで今日は言ったけど、色んなことが全部、あると思うけども、具体的に言えるところがあつたら、やはり、一番の問題は、どの辺が真面な教育者としてね…」

茂木「ああ～」

水島「やっていけなくなる感じは何処だったんですかね」

茂木「はい。社会主義ですね」

水島「ああ、社会主義なんだ」

茂木「はい」

水島「ああ、なるほど」

茂木「もう学校が完全に社会主義になっているんですよ」

水島「なるほど」

茂木「競争が排除されるんです。私は学生時代から学習塾で教えていたので、いかに生徒の成績を上げるかっていうことに特化したことをやってきたんですよ。それで、これは、結構、簡単なことで、こまめにテストをすればいいんです」

水島「うん。ああ」

茂木「毎回、テストすると、みんな競争原理が働くので、頑張る子は頑張るんですよ。そ

れを高校教師になってからやったところ、私の担当のクラスは中間テストで成績が伸びたんですよ」

水島「ああ」

茂木「それで社会科の会議があって、茂木先生の担当のクラスの平均点が高過ぎますねと言うんですよ」

水島「(笑)」

茂木「ええっ。それで、これは褒められたんですかって聞いたら、いや、高過ぎて不公平だって言うんですよ。ある教員は、答を洩らしていませんかって言うんですよ」

水島「うわあ、それは凄いね。ああ～、社会主義だなあ」

茂木「だから、その瞬間、ここの職場に居たら自分が駄目になると思って、直ぐに退職準備に入ったんですよ」

水島「ああ～、でも、なんか社会主義だね」

下村「いや、それはね、私が高校生の時もね、英語の先生のクラスだけ得点が高いんですよ。それは洩らしているってことじゃないけど、その先生がスパルタ教育の特訓で、生徒に無理矢理させているだろうっていう批判があったと」

茂木「あー」

水島「ああ～」

下村「だから、どっちにしても、やっぱり社会主義的な、平等主義的なね、何処か突出すると褒められるんじゃないかと、必ず批判される現場ですね」

水島「確かにテストとかそういうのをやるとね、やらなきゃいけないっていう感じになるからねえ。私もテストは大嫌いだったけど、でも、やっぱり、やるんだよね。そうすると力はつくんですよ。だから、それは妬み嫉みだね。これは酷い社会主義だね」

茂木「いや、うちの学校は私立ですよ。だから公立になったら、もう何をか言わんやっていうことです」

水島「なるほどねえ」

茂木「はい」

水島「私の通った静岡高校っていうのは受験校だったんだけど、私は勉強しなかったの
で、ずうっと文庫本を隠れて読んでいたんだけど、おっしゃるように社会科の教師なんか
ねえ、酷い奴で、今日は雑談しようとか言ってね、自分で作ったプリントみたいなのを、
みんなに配って、これが全部、日教組のもので、もう嫌になるぐらいでした。だから、授
業が無いと、みんな喜ぶんですよ。それで雑談みたいな形で、高教組の活躍を話す。それ
で、よくデモに出かけて授業を休むっていうね。これは本当にねえ、だから、私も解りま
すよ。高校はとんでもない教師が多かった。これ、どうですか、ちょっと、そういう…」

あんどう「何か話が取り留めなくなってきたと思うんですけども (笑)」

水島「いや、とりとめないけど、教育の問題から言うとね」

あんどう「はい」

水島「今、言ったように、そういう流れで社会主義的になってというかな、これねえ、アメリカ式なんでしょうけどねえ」

あんどう「うん。まあ、あのう…」

水島「それから教壇がなくなったでしょ」

あんどう「ああ、そうですか」

水島「今迄は先生が黒板の前に立つ時、みんなが見えるように、ちょっと高い段を置くけど、今は、先生は友達だ。先輩なんだと。だから師じゃないんですよ」

あんどう「うん」

下村「今、何処の学校でも教壇は無いですよ」

あんどう「ああ、そうですか」

水島「というぐらい、教師に対する感じが違っているんですよ」

あんどう「いや、そういう話で言うと、最近、親も学歴が高いから、自分よりも学歴の低い教師を何か馬鹿にしているっていう話を聞きますよね」

水島「ああ、そういうのもあるのかなあ」

あんどう「だから、子供に対して親が先生を敬いなさいとか、先生の言うことを聞きなさいとかではなくて、あの先生の言うことは聞かなくていいよ。だって、勉強が出来ないんだもん、みたいなね。そういうことを言っている親も結構、居るんじゃないかと」

水島「なるほど」

あんどう「そういう話を一部…」

茂木「酷い教師が多いですよ」

あんどう「酷い教師も多いんでしょうけど…」

下村「学歴じゃないんですよ。それだけクレマーというかね、ちょっとのことで直ぐ学校に電話する親が、凄く増えている。うん、これは学歴、関係なく」

あんどう「そう、だから僕も子供が高校の時、PTAの役員やっていたことがあるんですけど、その時に先生がどういう態度だったかと言うと、親の方を一生懸命に見る訳ですよ。いや、こんなに親の事、PTAのことを一生懸命やらなくても、子供の方を向いていてくれればいいのにと、僕は思っていましたけれども、親対応でへとへとになってという気はしますね」

水島「親に怯えているんだ」

あんどう「そう。何か文句を言われないようにしようとか、これをやってPTAは怒るん

じゃないとかね。そういうことで凄く委縮している感じはしましたねえ」

近藤「あのう、新卒で入って来た小学校の先生とかって、やっぱり24歳とかで、そうすると親の方が年齢が上だったりすると、まず、そこでマウントが始まるんですよ。私も、小学校でPTAをやっていたので分るんですけども、私は、その時、周りのお母さん達に若い先生を育てる為の保護者、PTAであろうよっていうことを言ったんですが、それに共感してくれる親、PTAは少ないんですよ。だって、自分の子供を預けているから、自分の思い通りって言うか、自分の要望を先生に言う」と

水島「うん」

近藤「先生の方が、おうちではこういう風にして欲しいということを親に要望しますね。だって地域と親と先生と子供を育てようってというのが、表向きのPTAと学校の関係性ですから。そうすると親の方が、自分より年下とか新卒1年目の先生とかに注意を受けた時に、やっぱりイラっとするらしいんですよ。だから、私がさっき保育園もって言いましたけれども、例えば学歴であったりとか、年齢であったりとかで、親から見て、そのモンペと呼ばれてしまうような親から見た時に、自分より学歴とか年齢とか何かしらが下である時に、文句を言う。

それは決して子供の為を思って、先生、うちの子はこうで、こうで、こうだから、こういう風にやって欲しいではなく、自分の親としてのプライドですよ。それだけ親が疲弊しているっていう風な捉え方も出来るけれども、社会の歪み、縮図、人間関係の歪な形っていうのが、もう親と先生とか、親と保育士とかというので現れて来ているって、私は結構、末期状態かなという風に思う訳ですよ」

水島「そうね」

近藤「みんな、子供の視点が無いので、はい」

水島「だから共同作業的な意識が無いんだよね」

近藤「うん、無いんですよ。そういうのね」

水島「ね。サービス業で…」

近藤「ああ、そうです、そうです」

水島「いかに立派なサービスで…、二十いくつの若造の訳の解らないような奴に、うちの子を預けられたら、たまらんよと」

近藤「そう」

水島「しっかりとした知識も経験のある人に教えて貰わなければ、うちの子は駄目になっちゃうみたいだね」

近藤「そうそう。じゃあ先生より高学歴で自分の方が偉いんだと思っている親御さんに向けて私が言いたいのは、そうやって先生を腐して馬鹿にして、敬わないような態度をとっているのであれば、自分のお子さんはちゃんと自分の手元に置いて、信頼できる家庭教師なり何なりを呼んで、おうちで育てれば宜しいのと思うんですよ。でも、それをしないで、サービス業だから預けて、自分は自分で働くと。お金を払っている。もう消費者感覚

で、学校や保育園、託児所に接するから、文句が出ると。だから、もう、そこが何か矛盾しているじゃないかという風に私は思うんですよねえ」

水島「私は、ずうっと30年前、40年前にテレビの熱中時代とか何とか先生とか、学校もののドラマを沢山、書いているんですよ。恐らく100本近く書いていると思うんですけど、その時の時代は、みんな、若い先生が喜ばれるんですよ。それで熱血先生とか、これは水谷豊が、そういうタイプで優しくてね、という、あれから丁度、金八先生でほぼ終わったんですよ。子供が妊娠するっていうリアルな話をテレビドラマでね」

近藤「ああ」

水島「そのあとは、もうねえ、ヤクザの先生みたいなね、教師のヒーロー像が変わって来たっていうことあって、それも社会的なそういうのもあるんだと思うんですけどねえ、非常に学校に対する不信でね」

近藤「うん」

水島「勿論、最近、覗きをやっているとかね、やたらと捕まるからね、こんな奴、信用できるかって思われちゃうのは当たり前ですけどねえ」

近藤「それで子供達に競争させないとか社会主義的なものを入れ込みつつ、でもじゃあ、親と学校の先生の関係性って、どうか。そこは競争ですよ」

水島「うん」

近藤「だから、それを見て育つ子供達は当然、矛盾を感じるし、それを言葉に表現できない小学校の低学年とか、それこそ4～5歳、年中、年長児っていうのは、やっぱり、心に溜めて行きますよね」

水島「うん」

近藤「そうすると、心の発達という部分に於いても悪影響を与えているという風に、私は思いますし、おうちに帰って、例えば学校でこんな風な理不尽なことを感じたんだとか、こういう矛盾を感じたんだ、先生に対してこう思ったんだとかということ、おうちで、例えばお母さんであったり、お父さんであったりに話して、そこでお母さん、お父さんが、でも、貴方は、これで、こういう風に考えた方がいいかもしれないよ、こういう見方もあるよ、みたいな対話が出来て居れば、子供のそういった疑問とか矛盾点とか、この鬱積したものというのは、おうちの中でちゃんと解消されて、じゃあ、また明日から学校、頑張ろうとか、また一生懸命、勉強しようとかっていう前向きな気持ちになっていくと、私は思うし、そのはずですけども、今、それがおうちで出来ませんよね。お母さんも遅くまで働いているしね」

下村「まあ、そういう家庭もあることは事実ですよ」

近藤「うん」

下村「あることは事実だけど、今、学校の先生は可哀想なぐらい心身症で、もう休職している人が8千人、9千人居て、地元の小学校を周っても校長先生が心配しているのは、誰かが、いつ学校の先生に対して休職しちゃうんじゃないかと。そうすると人が居ないから校長先生が自らクラスをもたなくちゃいけないとか、教室に入らなくちゃいけないという

ぐらい、精神的にギリギリのところ、そういう病んでいるような状況が、学校現場でも凄くありますよねえ」

あんど「欠員も凄く多いじゃないですか」

下村「うん、多いね」

あんど「だから教員が足りなくて、もう講師を何とか、かき集めて始めているけれども、また、それが直ぐ休んじゃって、もう、どうしようみたいな感じで」

高橋「悪循環ですね」

あんど「悪循環ですよ」

高橋「だから大変だから、辞めてしまうでしょ」

あんど「うん」

高橋「あんな大変なところって…、昔は教育学部は人気がありましたよ」

あんど「はい」

高橋「明星大学も小学校に、どんどん教員、送り出しましたけど、今は、もう教員になりたいっていう人は、どんどん減っていますよね」

あんど「倍率がどんどん落ちていきますもんね」

高橋「教員になっても辞めて行きますよね」

あんど「うん」

高橋「そうするとね、僕は、あとで下村先生に是非、ウェルビーイングの話をして戴きたいんですけどね。やっぱりねえ、親も教師も社会全体も幸福の物差しを失ってしまっている。だから隠しカメラで女子児童の何とかとかね、そういう馬鹿なことが出て、しかも、それが繋がっていると。5人も捕まっていたとか何かね」

近藤「ああ、ネットだね」

高橋「うん。ネットでお互いに交換するとかね。そんな馬鹿々々しいことが何故、起きて来ているのかと。やっぱり、その根本は、男女共同参画社会の時も4期8年、首相官邸で、その議論をしましたが、前にも、この番組で申し上げたことはあると思うんですけど、一回だけ安倍政権に対して批判をしました。それは第一次安倍政権の時には、あったかハッピープロジェクトという政務官会議で、経済の物差しから幸福の物差しを取り戻すという言葉をお使いになったんですよ。これは確か政策にも入ったんですね。ところが、第二次安倍政権になって、また経済の物差しに戻ったと、私は思ったんです」

下村「戻りましたね」

水島「戻りました」

高橋「だけど、それは間違っているんじゃないですかということ、官房長官はじめ大臣がいらっしゃる前で申し上げた。なんと、そのあと、その通りだとおっしゃったのは野田

聖子さんと当時の横浜市長だったから驚きましたけどね。まあ、それはともかくとして、何が言いたいかというと、親も教師も社会全体が疲弊して、もう、いっぱい、いっぱいになっていて、虐めが起きると直ぐ第三者委員会が開かれて、尾木直樹さんのような人が出て来て、管理社会が問題だあと、もう全然、解決に繋がらないですよ。そんな管理社会が問題じゃないんですよ。

もっと教育の根本的なところをね、やっぱり教育振興基本計画という5年毎に作られる中には、日本社会に根差したウェルビーイングの向上っていうのが入ったんです。だから僕は、日本社会に根差したウェルビーイングって何だと。日本を取り戻すと言う場合に、それは単なる江戸の話をされましたけど、渡辺京二が江戸末期の外国人がみんな日本の赤ちゃん、日本の子供は世界一幸せだと。当時、幸福度調査は無かったけれども、あったら世界一だと。

何故、幸せだったのかということを見ると、日本に本来あった、地域の繋がり家族の繋がり、共同体の繋がり、そういう中で共に育つというものが、家族を中心にして出来上がっていた共同体があった訳ですよ。そういうものを、もう一度、日本的な、日本型ウェルビーイングという名の下で、日本社会に根差したウェルビーイングって何なんだということ、教師も親も子供も一緒に、みんなでそれを求めて行くような動きを起こさないと、日本は取り戻せないんじゃないかと思っているんですけど、先生、どうですか」

下村「まあ、ウェルビーイングの前にね、一つ、話をしたいんですけども、最近、区内の小学校が大変だっているのですね、文部科学省の担当者と東京都の教育委員会と、板橋区の教育委員会のメンバーと一緒に、それから各区の議員と一緒に、その学校に視察に行ったんですよ」

高橋「はい」

下村「何が問題になっているかって言うと、今年、入った小学校1年生46人の内、外国人の子供が15人も居たんですね。ところが日本語を喋れる子って殆ど居ないんですよ。つまり授業が成り立たない訳です。言葉の通訳ができるようなサポーターの人は、中国語が出来る人が一人と英語が出来る人が一人だけど、ところが、特に中国では、そういう発達障害の特別な教育を公立の学校でやっていないから、そういう子供を持つ親同士が、口コミで繋がっているのかどうか。

特に、その小学校は中国人の子が多い中で、半分は障害を持った子ですよ。ですから、普通だって授業が成り立たないのに、言葉が判らない。それから、そういうハンディキャップを持った子が多いと。それから、あとは勿論、中国人だけじゃなく、そこだけで五か国ぐらいの国の子が来ているんですね。だから、これは現場では今のままでは、対応は無理です」

水島「これは無理だね」

下村「全く。ですから、これは、いかに学校の先生の努力とか、それからPTAの努力は超えちゃっているんで、だからと言って、それは不法入国した外国人の家庭じゃないから、管理ビザとかね、何らかの友好的な形で来ているところで、尚且つ、そこは何故、そんなに多くなったかって言うと、周辺が公団、URがあるところだから引っ越しがし易いので、余計に、そういう風になっているのかもしれないけれども、でも調べてみたら、この10年間で板橋区だけでも、外国人の子供が千人を超えていて、倍以上になっているん

ですね。

これから、どんどん、それは何処でも増えていくということと、それから何らかの障害を持っている率も増えていると。それから、そもそも小中学校に於ける不登校、学校に行っていない子供がもう35万人ですから、本当に現場が大変だから、まず、教育にしっかりと人的にも力を入れることによって、多様化教育をしながらやっていかないと、本当に疲弊してしまって、もう立て直しも出来ないというギリギリのところがあるから、その現場に対応して」

水島「そうですねえ」

下村「それから、今、高橋先生が言われた、やっぱり日本はGDPですね、経済成長が、物差しだったところを、それを、私はGDWとウェルビーイングスというんですけども、じゃあ、その教育は何の為にあるかって言うと、一人一人が本来、幸せになる為だと。幸せになる為の教育が何なのかっていう根本的な哲学といいますか、理念的な部分が学校現場と言うか、日本の教育の中で喪失してしまっているっていうか、解らなくなっている」と

水島「うん」

下村「まあ、そういうところに、しっかりとした価値観を置きながら、教育を、どうあるべきなのかということの物差しとして、ウェルビーイングですけども」

高橋「はいはい」

下村「そして世界標準的なウェルビーイングじゃなくて、やはり国柄によって、それぞれ違う部分がある訳ですね」

高橋「そうですね。はいはい」

下村「だから日本的なウェルビーイングっていうのを、しっかりと早目に作って、それを共有化して、それはイデオロギーの問題じゃないから、主義主張の問題じゃないので、別に社会主義だとか何とか言う問題じゃないので、それを明確にしていくことが、日本の立て直しに繋がって来ると思います。

今、各省庁では結構、そのウェルビーイングっていうのが骨太にも入りましたから、方針の中の3つか4つの中の一つには、必ず各省庁が入っていますけどね」

水島「なるほどね。でも、最初は二つあった前半の方ですよ」

下村「うん」

水島「これには手を付けられないですよ」

下村「うん」

水島「普通の自治体や普通の親だけでは無理ですよ」

下村「はい、無理です」

水島「私の知り合いでも養護学校っていうか…」

下村「はい」

水島「私も日本テレビのドラマで若草物語っていう学園物語で、発達障害の子が混合教育で学ぶというドラマの脚本を書いたことがあるんですけど、やっぱりねえ、少数なら未だいいんですよ。混合教育とか」

下村「うん」

水島「でも、今、それだけ増えて、まして、みんなの言葉が違う」

下村「うん」

水島「中国語や、これねえ、もう100%無理ですね」

下村「無理ですねえ」

水島「もう一つ言うと、いつも最近、移民問題でお金の事を言うのは、青山学院の福井義高教授が、労働者は仕事を失って給料が上がらないだけじゃないと。それだけじゃなくて、オランダの調査によると、移民、外国から来た人一人につきね、10年20年、30年、一生の時もあるけれども、少なくとも7千万から1億円がかかる。学校へ行くし、トイレにも行くし、病院にも行くし、色んなことある。

給食の問題もあるとか、こういったことを考えた時、労働力不足だから、簡単にホイホイ入れちゃうんじゃない。その費用は企業が負担しないから、国民が負担しなきゃいけない。個人インフラが7千万円だから、つまり100万人を入れたら70兆円がかかる。時間は10年20年単位で見なきゃいけないですよ。福井教授が詳細に実証的にちゃんと調べてくれていますけど、この問題は本当に考えられていないんですよ。

一人一人、入れるということは、どれだけ国民に負担をかけるか。そうすると、あいつらのお陰で、みたいになって、また対立が起きる。外国人に対する偏見や色んなものも起きて文化摩擦が起きてね、これは教師もやっていられないし、でも、これが今、現実な訳ですよ」

下村「そうです」

水島「今、板橋区の話聞いて、ああ、そういうものかと思ったんですけどねえ」

あんど「学校現場の問題って本当に現実で、今、市町村に丸投げになっていて」

水島「うん」

あんど「それで日本語が出来ない子供が今、物凄く大勢居る訳ですよ。それを学校現場が工夫してやっているけれども、今、下村先生がおっしゃったみたいに、言葉がいつぱいだから、そんな教員を見つけられるはず無いんですよ」

水島「無いです」

あんど「そうすると子供達は放置されて、結局、学校についていけないから学力は低いまま置いておかれる訳ですよ。この子供達が、それこそ社会人になる歳になったら、就職できないですよ、当たり前ですよ」

水島「うん」

あんど う 「 そうなると、もう生きて行く為に裏社会に入るしかなくなる訳ですよ」

水島 「 うん 」

あんど う 「 だから、これを生んでいるのは、我々日本人社会ですよ。日本の政治の責任ですよ。だから、これを今の内に止めておかないと、その負担は正に金だけじゃなくって、社会的な混乱っていう形で、子供達が背負う訳ですよ。だから、今の外国人労働者が足りないからって、どんどん入れて、更に家族まで連れて来ている。これは合法かもしれないけれども、今の内に本当に止めておかないと、将来、大変なことになる」

水島 「 そうですね 」

あんど う 「 これを、ちゃんと言っていかなきゃいけないし、これを言うと何か差別だとか排斥主義だとか言われるけども、そうじゃないんだと」

水島 「 うん 」

あんど う 「 今の内に止めておかないと、お互いに不幸になって誰も幸せにならないですよということですよ」

水島 「 うん 」

あんど う 「 今日知事さんが要望の為に、うちの事務所に来られましたけれども、やはり今、それを責任もってやっているのは地方自治体ですよ」

水島 「 うん 」

あんど う 「 だから学校現場は今、本当に大変だと。だから、そういうところも是非、国で責任を持ってやって貰いたいとおっしゃっていましたが、正にその通りで、はっきり言って、もう対応出来ません。これから色んな言語の生徒の為に、先生を揃えて各自自治体に配置するなんて、ほぼ無理ですよ」

水島 「 無理ですね 」

あんど う 「 そう。だから今の内に、これを止めておかないと大変なことになります」

水島 「 こちらに、よく出て貰う元警察官の坂東さんっていう中国語が大変、堪能で犯罪者の通訳をやっていた方が、もう100%無理だって。だから逮捕しても万引きとか全部、否定すると。目の前で取っている手を掴まれても否定すると。だから、これを通訳して、自白書を取って何だかなんて全然、無理だから、もう釈放しちゃう」

あんど う 「 もう時間が足りないから、検挙できない訳ですよ」

水島 「 そう。そうなんです」

あんど う 「 だから、それも凄い問題ですよ」

水島 「 だから、こういうことも、あのクルドの問題もね、実はそういうね、単にクルド人が悪いとか言っているんじゃないで、でも集団になれば、彼らはイスラム教徒で、あつちのトルコではご存じのように女性と簡単に付き合えないんですよ。女性にちょっかい出したら、お金を払って結婚するしかない。相手はバージンじゃなきゃ駄目だという。ところが日本の場合、そういうのが無いから、はっきり言って、中学生に対するレイプ事件が二

件、起きましたけどね。それから我々の仲間の、ここによく出てくれる方が現地へ行ったら、殺すぞと。お前の遺体をここに置くぞと、交番の前で平気で言ったっていうのは…」

近藤「私、丁度、昨日、川口へ取材に行ってきたんですけれども…」

水島「そうですか」

近藤「やっぱり危ないので、昨日は、ある程度、制限された中での取材だったんですね」

水島「うん」

近藤「ある公園の公衆トイレ、公衆便所ですね」

水島「うん」

近藤「私が昨日、見に行った時は当然、川口市のお金で修繕されていたんですけれども、毎回、壊されるという話ですよ。当然、便器であったり洗面台であったりっていった物が、とにかく壊され、破壊される。いつもコンドームが散乱しているって言うんですよ。

だから、結局、ハスギユル・アッバス被告のように、ちゃんと事件化して捕まえた場合は、凄く言葉に語弊がありますけど、ああ、良かったって言うてはいけませんけどもね、ちゃんと裁判して、罪を償わせることが、まあ、出来るけれども、そうっていない女性に対する性犯罪というのが、犯罪なのか、お金のやり取りがあるのか、その辺はちょっと判らないけれども、それは置いておいても、そういった所で性的なことが行われているって言うことが、川口では日常茶飯事になっていると。

まあ、カメラを持って入ったんですけど、撮ってはいけない所もあったので、全てカメラに収めることが出来ていないんですけれども、やっぱり夕方になって来ると、東京とか都心で仕事をして終わってから川口に戻って来たクルド人と思われる方が、やっぱり増える。

それで蕨市の駅前でも、日本は駅前って当然、煙草を吸っちゃいけませんよってなっていますね。喫煙者でも煙草を吸っちゃいけないって解っているから態々、吸わないですよ。でもクルド人と思われる方々は、その辺に座って（失笑）お酒の缶を持ちながら、堂々と煙草を吸っている訳ですよ。

だから、この感覚の違いっていうのは、もう言葉が通じて無理ですよ。じゃあ、言葉が通じない子供達にどうすればいいのかというのは、正に本当に大きな問題だし、そのクルドの方々の場合は、観光ビザで入って来ているのに難民申請をして、どんどん家族を呼び寄せて増えて来たっていう、勿論、そういった問題点もあるけれど、その労働人材が不足している、要は少子化で日本人の総人口が減って来ているし、現役世代が減って来ているところで、外国の方に来て戴いて働いて貰わなきゃいけないっていう事情があった。

じゃあ、何故、人口が減ったんですかっていうことを考えると、私は女性だから、敢えて言いますね。女が子供を産まなくなったからですよ。だから、私は女性だから言えることとして、女性は本当に子供を産みましょうって言いたいんですね。私は子供を3人、産みました。でも大きいので、私の子育ては8割ぐらい終わったっていう風に思っているんですが、今、本当に若い子達は子供を産まないですね。その産むことに対して一時期、それ

こそ上野千鶴子さんとか、あちら側の女性達が、女は子供を産むマシンじゃないとか言いましたけれども、実際、子供を産めるのって女性しかいないんですよね」

水島「うん」

近藤「だからと言って、別に未婚で子供を産みましょうとは言いませんよ。そこはちゃんと男性も責任を持ってね、妻と子供を養うんだという気概を持って戴きたいと思うんだけど、今、その婚活、結婚できないからと言って婚活、東京都も色々やっていますけど、その男性側の女性に求める条件の中にも、年収がいくらとか、女も仕事しなきゃいけないというのも入っているんですね。

だから、やっぱり男性達も意識を変えて戴きたいし、と言うか元に戻して戴きたいんですね。女性はちゃんと家で、おうちのことをやって子供を育てるということに特化するっていうことをね、それが子供の為だし、子供がちゃんと大きくなって、現役世代になれば、この日本を強く豊かにしていく現役世代になりますから、子供をしっかりと育てること。

じゃあ、育てる為には産まなきゃいけないですね。こうやって少しずつ人口が減って来たのは、女が子供を産まなくなったからだけでも、またね、私は、この間、去年かな、何処かの番組で令和版富国強兵って言いましたけれども、しっかり女性達が子供を産むという風に意識を変えながら、それをちゃんと応援して養っていくんだっていう男性も意識を変えて戴きながら、そういう方向性に持って行かないと、やっぱり、これから外国人が増えて行くんだっていう前提で、政治でも何でも色んなことを話していますよね。経済界でもね」

水島「いや、だから、おっしゃるように教育の問題で言うとね、彼らを外国の人達の受けてきた教育や習俗や宗教とかいうのも違うから…」

近藤「違いますね、うん」

水島「大人の方が来たら、もう、それは合わせられないですよ」

近藤「うん」

水島「ずう〜っと育てて来たので。だから、ある意味で言うと、移民問題っていうのは、今、自民党は一応、前に10年前ですか1千万人計画っていうね」

下村「うんうん、うん」

水島「まあ、今、あまり、これを言わなくなって」

下村「まあ、それは無くなりましたけどね」

水島「ああ」

下村「うん」

水島「というようなことで、ただ移民政策自体は変わってないっていうかね」

下村「うん」

水島「私から言うとね」

下村「うん。特別技能は事実上の移民政策じゃないかって言われていますよね」

水島「いや、だから下村さんねえ、名前は言わないけど、自民党の議員だったけど、入管法の改正の時、ここに来て、社長、大丈夫です。必ず帰るんです、帰りますからって言ったけど帰りませんって。結局、帰らないでズルズルベッタリで今、どんどん、370万人まで増えている。それで今、おっしゃるように、そういう矛盾が一回、入った人で非合法じゃなければ、そうそう帰れとは言えなくなるじゃないですか」

下村「うん」

水島「これねえ、さっき言ったように、一人あたりで一生居るとしたら、7千万から1億円もかかるっていうね。そのことを考えれば…」

下村「370万人って移民じゃないですけどね。外国人ですね」

水島「はい、外国人」

下村「外国人が370万人」

水島「これが結局、中国人だと、もっと帰化した人も居る訳ですよ」

下村「うん」

水島「それから、もう一つ、あまり移民の話になっちゃうと拙いけど、中国の国防動員法とかね、中国の人達が、ずうっと国外でも影響を受ける訳でねえ。それと、やっぱり、教育の問題も多文化共生って、難しいっていうことを、我々は、もっと自覚してもいいんじゃないかってね」

あんど「いや、多文化共生は無理ですよ」

水島「無理だよな」

あんど「やっぱり国が纏まろうとしたら、多文化共生じゃなくって同化して貰わないと無理です」

水島「そう」

あんど「だから、やっぱり、その為にも言葉」

水島「うん」

あんど「日本語が喋れて、日本語でコミュニケーションがとれるということを共通の認識にしないと、色んな言葉があってもいいんです。色んな言葉で喋りましょうじゃなくて、日本なんだから日本語ですと。日本語を喋ってくれる人達だけ来て下さいと。このぐらい、キチっとやらないと纏まらないです」

水島「あと、お客さんで来てくれる分には別に全然、構わないけど、林望（リンボウ）さんというエッセイストがイギリスのことを書いていたけど、イギリス人は必ず聞くと。どうなんですか、永住するんですか、教授として滞在するんですかって聞くから、3年間ぐらい、この辺にお世話になるって言ったら凄く歓迎してくれるって。でも永住するつもりだって言うと、物凄く冷たくなって、近くに居ないでくれ、みたいなね、こういうことが現実にあるっていうのを書いていましたけどね、やっぱり建前と本音だけ、我々の国は

建前も本音も無いみたいなねえ。本当に歓迎したらどうだ、みたいな人達が居るっていうねえ。

だから、教師達って本当に可哀想ですよ、現場に川口の市議会議員が二人来て、ああ、県会議員の人も居たか。言っていましたけど、悪いけど、政府はどんどん入れちゃって、現場の事は自治体で頑張れっていうね、どんどん入って来るんだから現場でやれっていうのは無理だって」

下村「ただ、そのクルド人の問題は難民だけど、例えば、さっきの板橋の小学校の問題は別に難民じゃないんですよ。合法的に入っているんですね」

水島「うん、だから問題ですよ」

下村「合法的に入っている子供達を排除することは出来ないから、それは…」

水島「入れちゃったらね」

下村「それは、しっかりとね、やっぱり義務教育については、逆にちゃんとやって貰わないと、だから日本語をちゃんと覚えさせて、日本のルールとかマナーとか道徳とかを身につけて貰わないと。20年ぐらい前にブラジル日系人を受け入れた時にあったでしょう」

水島「うん」

下村「その時、群馬のある地域はブラジル日系人が沢山、居る所ですがね、ところがその時は結構、緩やかで、日本語が解らないから、日本の小学校、中学校へ行ってもしょうがないということで、尚且つ、日本人じゃないから放っておいて、義務教育であっても強制的に学校に来いと言っても言葉もよく解らないから、結果的にその子達が中学を卒業しても、就職先は無いですよ。真面に勉強もしていないし、真面に言葉も喋れない。

だから、その地域の治安が非常に悪化して問題になったと。だから、それは子供達だけの責任ではなくて…」

水島「うん、そうです」

下村「日本社会がきちっと、ですね」

水島「日本の仕事ですよ」

下村「やっぱり逆に教育を受けさせるような、日本に、今、正に同化という言い方もされましたが、やっぱり日本社会は日本社会でちゃんと外国の子供に対してもそうですけど、ルールやマナーを学ばせるようにしていかないと、本当に治安悪化になっちゃうところがありますよね」

水島「全くそうですけどね。ただ入れちゃうと、責任を負う訳じゃないですか。だから、そここのところを、ちゃんと考えないと、安易に労働力不足だっていう形で、技能実習生だ何だっていう形でやると、そこがあるっていうね、さっき言ったように一人当たり7千万から1億円かかる、国民にこの負担を与えるっていうこともね。やっぱり教育の機会が平等になりますからね。もし日本国民に帰化すればね」

下村「まあ、これ以上、増やすっていうのは、やっぱり何処かで制限して、ただ現実問題として労働力不足のところがあって、外国人の技能者等が相当、フォローして、例えば、

コンビニへ行っても殆ど外国の人だし、農業とか分野的には建設現場もそうだけど、成り立たないような産業が今、日本社会で現実にありますけども、でも、いつまでも外国人に依存するようなパイをどんどん増やしていくということについては、それは、もうヨーロッパの事例を見たら、返って結果的には国力の低下に繋がりますよね」

水島「いや、だから…」

茂木「ちょっと議論があるんですが、宜しいですか」

水島「はい、どうぞ」

茂木「まず、教師が疲弊しているという話がありました」

水島「うん」

茂木「下村大臣が板橋区を挙げられて、外国人の子供が30人学級ですか35人？」

下村「今年、小学校1年生46人が入った内の15人が外国人で」

茂木「ああ」

下村「ニクラスだから、その外国人の殆どが実際は日本語が喋れない、小学1年生ですけど、それから障害を持っている子も居るから余計に大変だっていう話を」

茂木「クラスの2割ですね」

下村「そうですねえ、2割か3割ですねえ」

茂木「この子達をですねえ、今…」

下村「3割」

茂木「3割ですね。この子達を今、追い出す訳にもいかず、じゃあ誰がその子達の教育を負担するんだっていうことで、それは勿論、地域の学校でもなければ、政府でもなくて、これは、そういう外国人を受け入れている企業ですよ」

水島「それは、そうですね」

茂木「経済界ですよ。だから、今、例えば、特定技能、外国人を受け入れると72万円の助成金が出るって言うんですけども…」

水島「助成って、金を貰っているんだよね」

茂木「これは逆で取るべきですよ」

水島「そうです」

茂木「政府は」

水島「そうです。いや、本当にそうですね」

茂木「だから全ての経済団体が受け入れ賛成じゃないですか。そこから献金を貰っている」

水島「うん」

茂木「殆どの政党が、これに沈黙じゃないですか」

水島「うん」

茂木「今日、たまたま高市さんの出馬会見があったですけども、外国人問題については、たった一言ですよ」

水島「いや、そうだよねえ」

茂木「ええ」

水島「昨日、岸田さんの弟さんがね、最大80万円ぐらいの助成金のコーディネート会社をやっているっていうねえ。どんどん入れているって」

茂木「うん」

水島「こういうのを紹介したんだけど、殆ど報道されないんですよ」

茂木「うん」

水島「今、言ったように保守派と言われる、まあ、私は信じていないけど、高市さんですらね。こういうことは大事な話でしょ」

茂木「うん」

水島「全然、そんな言及は無いんですよ。だから、やっぱり、この問題をやらないと、日本が根本的に教育も駄目になっているけども、全部、日本の社会が駄目になっていくっていうねえ」

茂木「これ、一番の安全保障じゃないですか」

下村「そうですね、そうです」

水島「うん、その通りです」

茂木「うん」

あんどう「そうです。だから…」

茂木「どれだけ自衛隊、立派にしたってねえ」

あんどう「そうそう、そう」

水島「うん」

茂木「内から壊れちゃうんだから」

あんどう「だから、それこそカークさんの講演でも言っていましたけれども、まず少子化が一番の問題だと。やっぱり日本人が日本人の子供を産まないと、これは国防の最前線だということですよ。それと今の外国人労働者の件ですけど、これも結局、経済界が低賃金労働者を外から便利に入れているんですよ。これは現代版、奴隷制度ですから、これを、きちんと我々は、こんなこと、日本はやっちゃいけないんだということで、国の立

て直しを図っていかないと、本当に国が壊れますよね。子供達は結局、勉強も出来ないで放置している、極めて人権無視ですよ」

水島「うん…」

あんどう「こういうことを日本の社会が今、堂々と政権を持っている政党がやっているんだと。我々は、このことを本当に恥ずかしいと思わなきゃいけないと」

水島「いや、そうですね」

あんどう「それは強く思いますね」

水島「今、茂木さんが言った通りでね、これは企業が負担すべきですよ。もし、どうしても労働力不足だったらね。或いは、もっと言えば、70万人以上の引き籠りが居るんだから、給料をもっと、その分だけ出せば、割と働く人はもっと出て来ると思いますよ」

下村「ああ、引き籠りはその倍も居るんですよ。146万人」

水島「140万になった…」

下村「146万人。それでね、ただ引き籠りは、また別の話で、給料をあげれば来る、出ないっていう話じゃないから…」

水島「いやいや、そっちは、そんなに単純じゃないです。だけど、やっつけられるかっていう思いがあるのと、やっぱり…」

下村「それから今の話、ちょっとね」

水島「うん」

下村「企業については、その通りだと思います」

水島「うん」

下村「ただ、その技能実習生と、子供の話は別ですよ。彼らは単独で来ているのでね。子供を持っているっていうのは、逆に言えば、経営管理ビザとか他の形で家族で来ている場合が多いから、だから分けて考える必要がある。子連れでオッケーっていうのは、特定技能実習生で更新した人は家族を呼ぶのはいいということだけど、基本的に家族は来られませんから。ただ、実際は低賃金で働かせているという労働対象だから、だけど、しかし、低賃金であることは事実だから、今の日本の一般社会と比べるとね」

水島「うん」

下村「その問題を、いつまでも放置する訳にはいかないということは、その通りだと思いますね」

水島「そうですね。それと、やはり中国を見ても、大学を出た連中が失業していて、だから、もう外へ出てというのは凄く強いですよ。それで彼らはそういう意味で言うと、一族意識は凄くあっても、あまりホームランド意識とかそういうのが無い。日本と違うのは、そこですよ。だから、やっぱり川口の、まあ、さっき言ってくれたけど、最初、問題になったのは、チャンネル桜でも取り挙げたけど、マンションに中国の家族が一回入って来たら、変な言い方だけど踊り場でウンチしたり窓からゴミをボンボン捨てたりして、それ

で大騒ぎした。みんなが注意しても中々変わらない。それで段々、家族が入ってきた。最後は、日本人が出ちゃって今、落ち着いたのは、殆ど中国人のマンションになっちゃっているというね。

それから、外国人に対する土地規制も未だ出来てない。それから、さっき茂木さんがおっしゃった、移民の問題は安全保障の問題だって言ったけど、本当に国防動員法になった時、今、もう100万ぐらい居る中国の人達、実際は、もっと多いかな。帰化しようとしていないと、そういう影響を受ける人達が居るっていうことを考えるとね、それから私が今、南京の反撃論証映画を創ろうとしていますけど、向こうは兆単位、1兆円単位でポンポン作っていますからね。

731部隊や南京写真館という、ありもしないことを、今、CGとか何か使うから。今、我々は写真を持っていますけれども、支那事変から南京の古い写真を凄く集めました。1万円で買った本がもう10万、20万円になっている。誰が買うと言ったら彼らですよ。

つまり我々の国は、そういうお金とかが無いから、もう文化戦争というか、そういうプロパガンダ戦争で全部、圧倒されている。それで偉そうに言う訳じゃないですけど、反撃の映画を作った人いますかって言ったら、高橋さんには色々お世話になりましたけど、実は2本の南京問題の映画を作ったのは私しかいないですよ。今回、またガタガタ始まっているから、もう一本、また実証的な映画を作りますけど、勿論、メディアは無視するし、私の作ったものは今、YouTubeではバンされますから」

下村「ああ、そうですか」

水島「うん、そうですよ」

下村「うんうん」

水島「国会でも一回、観て貰いましたけど、ただ、それぐらい今、言論弾圧とか、表現の自由というのは抑えられていますからねえ。だから、そういう中で、圧倒的にさっき言ったJapan's Holocaust、あれは、もう世界的にやっていますよ。それで何かあった時に、日本人は虐殺されてもしょうがないと。

或いは、もっと言えば10万人以上の在中日本人。もう10万人ぐらい居るじゃないですか。あれだっていつ爆発して、ああいうものが始まるか判らないぐらいですよ。企業が責任を持つのかっていうね、こういう我々の同胞というの、本当に危機感を感じますよ。だから、やっぱり安全保障の問題だっていう風に、移民の問題も教育の問題も考えなきゃいけない。掛谷さん」

掛谷「はい」

水島「こういう問題っていうのは、教育の問題にも繋がっているけど、日本は、国防とかそういう教育が全くされていないからね」

掛谷「ああ。まあ、私は移民ということで、ただ形として日本人と結婚するパターンですね。今も世界陸上をやっていますけど、黒人とのハーフの選手が物凄く活躍しているじゃないですか」

水島「今、活躍しているよね」

掛谷「彼は日本人ですよ、日本語を本当に普通に話していて、だから多分、お父さんかお母さんが日本人だと、ああいう形になると思う。やっぱり、日本って移民を制限って言うと、非常に排他的って言いますけど、これだけハーフの選手が活躍している、それは、他のスポーツでもそうですよね。サッカーとか。一方、中国とか韓国に黒人とのハーフの選手が居ますか。だから日本ってというのが、いかに寛容な国かってというのが、それを見るだけで解るんですよ。だから既に移民の受け入れの仕方、日本人と結婚する以外のパターンは制限するって言った時に反論されたら、じゃあ、そのスポーツ界を見てみると。日本がいかに、その中国…」

下村「しかし彼らは移民では無いですよ」

掛谷「まあ、そうです。最初、来た時はね、だから…」

下村「親はね」

掛谷「親は移民で来ていて…」

下村「まあ、移民じゃないんだけど」

掛谷「移民っていうのは、はい。まあ、まあ…」

下村「移民ではない。はい」

掛谷「はい、はい。だから、そういうところをアピールできるかなあって一つ思います。あと、すみません、教育の話に戻すと、最初に下村先生がおっしゃった話で、最近の若い人は靖國に行くっていう話で、それこそ安倍首相とか下村大臣の成果なのかもしれませんが、今の20代ぐらいの人は物凄く、しっかりしているなあと思います。茂木先生も思われますか。ああ、そうですか。」

やっぱり日本が、どうもヤバくなったというのがあるのか、危機感があるのか判りませんが、例を挙げると、国際会議に学生が発表する、或いは、若い研究者が発表する時に、英語も上手ですし、プレゼンで自分のやった内容を解り易く話すということのスキルに物凄く長けています。だから国際的にコミュニケーションをする能力っていうのは、本当にレベルが上がったなあ。

40代、50代、60代の日本人は全く駄目で、英語も下手だし解り易く話すということも出来ない。全く本当に駄目ですよ。技術力はあるかもしれませんが」

水島「それ、よく解ります」

掛谷「はい。それが今の20代とか30代前半ぐらいの世代が、出来るようになっているんですね。これは本当に物凄い希望の部分。だから今日は衰亡日本を救うですから（笑）」

一同「（笑）」

掛谷「私は本当に期待しています。それで、そういう技能の今の部分は、あくまでも技術の部分ですけど、且つ、その精神の部分ですと、靖國に行くっていう話があった時、この前、オリンピックのあとは何をしたいですかと聞いたら、早田陽菜さんが知覧に行きたいという具合におっしゃった訳ですよ。」

実は、うちは子供が3人居るんですけど、この前、1人が大学を卒業するっていうので、

卒業旅行に行くって話を家内から聞いて、何処へ行ったのって聞いたら鹿児島へ行ったとか言うから、ああ、それだったら行く前に、知覧へ行くことを勧めておけば良かったと言ったら、何も言われぬのに知覧へ行ったらいいです。知覧へ行ったら若い人が沢山、来て居たと言っていました。

そのぐらいに変わっていますから、それは、それこそ下村大臣の成果なのかもしれませんけど、だから、今、若い人は本当に物凄く期待出来るので、彼らが衰亡日本を救ってくれると思っています」

水島「うん」

下村「もう一つだけ切り口で言えば、新聞やテレビを見なくなったっていうことがあるんじゃないですかね」

一同「(笑)」

掛谷「ああ、それはあるかもしれませんね (笑)」

水島「ありますよ」

下村「そういうのをねえ、WG I Pの洗脳になっている規制メディアっていうか、オールドメディアの…」

掛谷「はいはい、はいはい」

下村「そういうことに、若い人は、もう捉われなくなったから、SNSで独自の、そういう新聞テレビでない情報も得るようになったし、非常に発想が、そういう捉われから解放されつつあるところもあるんじゃないかと思えますね」

掛谷「だから、そういう意味で言うと、今、教育をどうするかって言うと、どうしても制度のことを考えるんですけど、それよりは、それこそチャーリー・カークって、制度の中で生まれて来た人じゃないじゃないですか。どちらかと言うと、出来るだけ縛りを外して、そういう人達に自由にやらせるっていうことが必要かなあと思うんですね。どうしても日本って、それこそ社会主義じゃないですけど、寄せるって、まあ、ちょっと雑なフリップですが、こういうのを作って来たんですけど、私がいつも考えるのは、日本人ってどうしても社会主義的なので、非常に平均は高いんですけど、能力をそこに寄せちゃうんですね。

アメリカだと、チャーリー・カークとか、それこそ他にも優秀な人は沢山、居るんですよ。ここが居ないんですよ。ここを作る為には、やっぱり自由に、それこそアメリカだとホームスクールとか、もうアメリカでも、やっぱり学校が腐っているので、それこそスクールチョイスの話が出て来るとか、或いは、ホームスクールにもしちやおうよっていう話が出て来るので、だから、もう規制を緩めて自由にすると、日本でもこういうところで人が出て来るんじゃないかなあっていうことで、私としては出来るだけ…、こういう人達は政府の方針の計画経済で育てられるものじゃないと思うんです。

出来るだけ自由で、だから、今、日本で何が問題かって言うと、共通テストで、みんな基準が決まっているから、例えば、極端な話、受験産業にいらっしゃるから、よく解ると思うんですけど、理系に来る人は、みんな、社会は地理を選択しているんですよ。日本史や

世界史をとっている理系の学生って、ほぼ居ないそうですね。おかしいじゃないですか。

やっぱり技術も解るんだけど、歴史の事も知っている人とか、そういう多様な人材が必要なのに、今は、みんなが点数を取る為に、こういうパターンで勉強するというのは決まっ
ていて、画一化している。だから能力だけじゃなくて、学ぶ範囲も画一化しているので、
もっと自由にして、それこそ極端な話、ミレイさんのアルゼンチンとか、アメリカでも教
育省を廃止しろという話が出ていますけど、もう大学も県単位で、アメリカは州立大学じ
ゃないですか。陸軍士官学校と海軍士官学校は、師範学校以外は。

だから出来るだけ、そうやって色んな、それこそ江戸時代って、さっき話が出ましたが、
藩校で単位であって、そこから多様な人材で優秀な人材が明治維新以降の日本の近代化を
支えたと同じように、もっと中央集権じゃなくて色々バリエーションにして、そのなか
ら、はみ出た優秀な人材が出て来て、それが日本のチャーリー・カークになってくれるっ
ていう形にしないと、あまり計画経済的に、こういう教育ってやっても中々そういう人は
出て来ないと思うので、何か、そういう自由度を増やすことで、日本のチャーリー・カー
クが何とか出て来て欲しいなと思っています」

水島「これは、まあ教育の問題になると思うんだけど、ちょっと異なった見方をしている
のは、その凄く今、面白いのは…」

掛谷「はい。これですか」

水島「何が面白いかって言うと、集団でそういう、いいのは中の上とかね」

掛谷「はいはい」

水島「そのぐらいのクラスが凄く多いじゃないですか」

掛谷「はいはい」

水島「少数のエリートというのは少ないって」

掛谷「そう」

水島「これ、ご指摘の通りだと思う」

掛谷「はい」

水島「でも私がずっと言っていることは、日本人っていうのは、護送船団方式の日本型の
資本主義。みんなでやった時、初めて個性が発揮できる」

掛谷「うん」

水島「お前独りで頑張れよとかね、切磋琢磨して競争したら頑張るぞと、そういう人は、
本当に稀で、集団で会社の中でね、集団の中で個性を発揮して、いい仕事をする。これは
ソニーでもパナソニックでも昔の70年代、80年代、90年代ぐらいまでは、そういう
集団の中で個性を発揮できるのは日本人で、新自由主義的にみんな競争してやればい
っていう風になったら、途端に個別撃破されてバラバラになる」

掛谷「はい」

水島「独りぼっちは、みんな弱いから。日本人は孤立した個人としてね、無理だと思う」

掛谷「いや、あのう…」

水島「だから、そのところを…」

掛谷「はい」

下村「私は、それには反論があつてね」

水島「うん」

下村「冒頭、先生がおっしゃっていたように、日本っていうのは、その空気っていうかね、世間っていうね」

掛谷「はい（苦笑）」

下村「これはDNAとしてあると、私は思っているんですね」

掛谷「はい」

下村「だから教育は教育でね、これからAIによって今、小中高校でも1人1台タブレットを配っているでしょ」

掛谷「はい」

下村「これまでの均一的な、みんなで一斉教育、画一教育じゃなくて落ちこぼれで、ついていけない子供が沢山、居たし、一方で吹きこぼれというね、物足りない子も居ると、それが個別最適化教育で、もっとタブレットを使うことによって、単なる集団教育じゃなくて、クラスは35人居たとしても、それぞれが、数学なんか一番出来るんだけど、そういう風に個別最適化教育をすることによって、今後、伸びる子は、もっと伸ばしてあげると」

掛谷「はい」

下村「例えばアメリカでもね、高校で大学の単位を取れるような、そういう子供は先取りすることも出来ますよね。日本でも、そういう風な出来る子はどんどん伸ばしてあげると、逆になんか、逆にAIと科学技術を導入することによって、これから、そういう風になっていくと思うし、それと水島さんの今の話はね、別の問題として捉えても全然、心配ないじゃないかと、私は思います」

水島「いや、私は画一教育をやれとか言ったんじゃないんですよ」

下村「いや、そうなんだけど」

水島「全然、違う。今言ったように、みんなで生きているというベースがあつて、AI使ってやれる子はやれるというようにしていかなきゃいけないんでね」

下村「だから、私は今度、最適化教育をしても、その危惧は多分、大丈夫だろうなつて」

水島「一番、問題なのは、子供がバラバラにされて独りぼっちになって、頑張れる奴は頑張るって、私が思っているのは、今の日本の社会がAIで、AIじゃなくても、ITっていうか、そういう科学的なものを先取りした連中が今、お金持ちになっていますよ。」

それで落ちこぼれた人達がついていけないみたいなのがね、貧富の格差とかそういうものが凄く出ている。六本木ヒルズとか、そういう連中は、やはり残念ながら、こいつらは能力が無いからしょうがないんだという社会、勿論、頑張る人達は、個性を伸ばすことは物凄く大事だけれども、私から言うと、我々が持っていた日本人の共同体意識とか、共同体というのは今、空間で生きているだけじゃなくて、もっと先祖とも繋がって、未来の子供達と繋がっている縦軸の意識を持った共同意識を持った日本人を教育で、これから作っていかないとね。

お前ら一人一人で、みんな、頑張れと、その中だけは応援するっていうような形では、この教育の問題は、私は、ちょっと…」

近藤「私、今、縦軸っていう…」

下村「今の考え方はその通りだけど、それと、これは、また別の話だと思うね」

掛谷「縦軸だから、みんなが知覧に行くぐらい縦軸があると私は思うんですよ。そういう精神性の問題以外に、社長がおっしゃっているのは、この日本の特性って、実は製造業向きですよ。だから、こういう、ある程度、中間的に優秀な人達が物凄く沢山居るとするのは、物造りの産業とかでは物凄く生きるんですけど、最近の産業がICTとか、そっち系の、少数の天才が引っ張っていく、且つ、それが一般の雇用も生むっていうパターンもあるんだけど、それが今、中々つくれないから、日本が中々、日本のGDPを増やすのに貢献するような産業を新しく作れないっていうところがある…」

水島「そう。いや、全くそのことで言うと…」

掛谷「だから、うんうん」

水島「前に言ったじゃないですか」

掛谷「それを引っ張る人が、必要だなと思っているんですね」

水島「特許を取った奴にね、会社が凄く安い金しか払わないっていう裁判を起こして、そういうのがあった訳でね、だけど、そういう人達をどうやって育てる…」

掛谷「だから、それは自由にすると、出て来ると思うんですよ」

水島「自由にするっていうのは、経済的なとか…」

掛谷「はいはい」

水島「システムの、ちゃんと募集していかなきゃ、お前は自由だよと言っても、研究の為には、お金もかかるし、誰がお金出してどうやるって、ちゃんと、それでお前は思う存分、やってみなと、やれるだけのシステムを作ってやらないと、お前は自由だっていうだけだと、もう妬み社会とか嫉み社会で足を引っ張る奴ばかりが出て来るといいうね」

掛谷「まあ、だから、そこを言うんだったら、やっぱり、結局ね…」

水島「だから自由になるっていうのは、どういうことなの」

掛谷「外国に若い優秀な人を送るっていうしか…」

水島「だから、どんどん行っちゃうんですよ」

掛谷「それで、まあ、そういう人達が帰って来て、日本で産業を興すような形しかないかもしれないですね。私は本当に優秀な学生さん、逆に物凄く優秀な人は日本の企業に入っちゃうと潰されるから、それこそアメリカで勝負したらいいんじゃないのって」

水島「うん。そうだね」

掛谷「私は結構、言いますよ」

水島「う～ん…」

高橋「私はね、今日のテーマは『教育が衰亡日本を救う』ということだから、日本を救う教育って、どういうことかなあというのを、みんなでもっと議論する必要があると思うんですけどね。その時に、大谷翔平のことを考える必要があると思うんですよ。大谷翔平は、これだけ世界から注目を集めているけど、彼を育てた教育はどういう教育なんだと。この間、我が麗澤大学にウェルビーイング研究センターが出来まして（笑）」

水島「へえ～、凄いですね」

高橋「それで麗澤大学90周年記念事業で、OECDの全教育統計局長と僕が議論したんです。その時に欧米型のウェルビーイングと日本型ウェルビーイングの違いについて議論したんですけど、大谷翔平の教育は、皆さん御承知のように、目標達成シートっていうのが大きなバックボーンになっている訳ですね。あの中に沢山のことが書いてあるんですけど、ポイントは非認知能力です。

それが彼の中に入っていて、それが日本の子供達には全く無いんです。これはOECDの統計ですけど、グラフがありまして、日本が全部、最低のグラフ、これは何かと言うと、困難に直面した時、解決策を見つけることが出来ない。それから人生に意義や目的を感じていない。それから人生に満足していないと。数学的なリテラシーとか科学的リテラシーとか国語力とか、そういうのは一番とか二番とか三番とか、81か国の中でトップレベルですけど、今言った非認知能力は世界最低ですよ。

そうすると、大谷翔平はどうやって育てたかと言うと、それは勿論、家庭教育もありますけど、二つのことがあって、一つは、やっぱり家庭教育ですね。非認知能力は、ヘックマンが幼児期にどういう非認知力を育てるかが一生を大きく変えるんだと。これをことごとく研究で、長期追跡調査で実証した訳ですよ。

それが今、東大の遠藤利彦先生が、幼児にどういう風に非認知力を育てるかっていうことを全国に広げておられますけど、そこに大きなカギがある。今、親学は、推進議員連盟は壁にぶつかっちゃいましたけど、若い大学生達が若い発想で、親になる為にどういう学びが必要かっていうネットワークを創りつつあるんですね。

それで、例えば、ある新入社員達が自分達で親スクールというのを創ろうというので、それは僕らの親学に基づいたんじゃないでなくて、自分達、若い世代が社員向けに、どういう風に展開しようかっていうことをやっているんですけど、それは親になる為の学びっていうのも必要じゃないかと。これは、あとで近藤さんにも伺いたいんですけど、僕はフェミニズムの影響っていうのは、やっぱり若い女性達にはかなりあると思うんですね。

結婚とか、それは何か縛られるものだとかね。だから固定的役割分担意識、男らしさ、女らしさとか、そういうこと自体が差別だというような考え方があって、或いは、上野さん

の様に、お一人様とかいうのは大学1年生で読んでいますからね。なぜ貴方は、大学1年生で、今、お一人様、読まなくちゃいけないのと。将来、本当にお一人様になった時に読んでもいいけど、今から、それを読まなくてもいいんじゃないのと、僕は言いますが、それはフェミニズムっていうものが、多くの大学で必修になっていますよね。

じゃあ、それを教えている先生方は殆どイデオロギーを持っています。最近、僕が一番、困ったなあと思うのは、性はグラディエーションっていうのが教科書にどんっと入って来た」

水島「う～ん」

高橋「男と女とに分けられないんだと。トランプさんは男と女しか無いんだと言ったけれど、僕は渋谷のマンションに居て、いつもLGBTのデモを見ていると、私の性別は私が決めるうっ！とか、男女に二元論は廃止せよとかね。いや、生物学的に言えば男と女だと。勿論、両性具有とか例外はあると。しかし、それは極僅かであって、それを一般化して、多様化と言っちゃうと、子供は混乱する訳ですね。

自分の中にあるものをどう考えていいのかとね。しかし、前にも見せたことがありますけど、もう、教科書の中に、こういう形でどんどん入っているんですよ。性はグラディエーションって、これ、教科書ですよ」

水島「うん」

高橋「男と女、性自認というのは、自分が男か女か自分で決める。それから性的思考っていうのは、男が好きか女が好きか。性表現、大人の男の服装が好きか、女の服装が好きか。それから身体性、まあセックスですね。その4つは動くと。それで自分が決めればいいと」

水島「うん」

高橋「これは子供の権利だと。性的自己決定権だと言うと、教育基本法第10条に書いてある親の責任、親の養育権ですね、そこと必ずぶつかるんですよ。僕が心配しているのは、アメリカでこれが大混乱になって、学校と親が対決になって分断が広がった訳ですね。

今もアメリカでは色々な意味で分断が広がっていますけど、何故、対立したかと言うと、学校の性教育の事を親に言うなよと先生は言う訳です。そうすると子供達が混乱する。親がクレームをつけると、学校と対決する。それで訴訟が広がったと。イギリスも同じことが起きたんですね。ところが日本は今、LGBT理解増進法が出来て、それで包括的性教育の推進法まで作ろうという動きがあって、それを読んでみると、性教育と道德教育は真っ向から相対決すると書いてある。道德教育が教科になっているのに、道德教育を否定する性教育が包括的なのということを言っているんですけど、今、超党派の議員連盟で、これを推薦、推奨する動きもあってね」

水島「うん」

高橋「多様性ということは大変、大事だけど、そこに共通性っていう縦軸と横軸の多様性というもののバランスとか調和を図っていかないと、やっぱり混乱してしまうので、僕は生命誌研究館という中村桂子さんの生命誌っていうのが大好きですけど、多様だけど共

通、共通だけど多様と、それが日本らしさであってね、だから日本社会に根差したウェルビーイングっていうことを、もう一回、捉え直して、大谷翔平を育てた教育が、僕は家庭教育と、それから、或いは、僕は師範塾では、東京、大阪、埼玉、福岡の師範塾に関わりましたけど、原田隆史さんという目標達成シートを作ったのは大阪師範塾の二期生です。

それで目標、長期目標、短期目標というのを、きちっと決めて日記をつけさせて、それで彼をグウッと引っ張っていった訳ですね。それは恐らく人間力を育成するという意味で、別に原田隆史だけが出来ることじゃなくて、参政党の教育政策を見ていましたら、教育力の質を高めて、卓越した特性をもつ教員を養成する現代版師範学校を設立すると」

水島「うん」

高橋「教員養成、プログラムを確立するとありますけど、本来、僕は師範塾で10年間、東京、大阪、埼玉、福岡の四か所でやって来ましたけど、その教員の研修というのは、研究と修養だけど、研究はあるけど修養が無い。修養のプログラムが無い訳ですね」

水島「うん」

高橋「だから隠しカメラで撮影するなんていうことが広がっちゃう。じゃあ、実際に教師を経験されて、色々な教師が今、きつい中にある。そういう時に、教員養成のプログラムってどんなことが考えられるのか是非、茂木先生のご意見も戴いて…、それは無理ですか」

茂木「だけどプログラムを作る以前に、学校の先生って仕事が多過ぎるんですよ」

水島「はい、具体的にね」

茂木「まず生徒指導ですよ。今は、かなり人数が減っているから楽になっているはずですけども、多分、僕らの時代よりも、かなり管理が増えている」

下村「増えている。仕事も増えている」

茂木「増えている。膨大な書類を作らなきゃいけないし、一人一人の評価もしなきゃいけないし、プラス部活もやらなきゃいけないし、それで学校では教材研究が出来ません」

水島「うんうん、うんうん」

茂木「だから僕は以前から教科を教える先生と、部活の先生と生徒指導の先生は分けるべきと想着いて」

水島「ああ、なるほどね」

茂木「うん」

水島「ああ」

下村「今は中学校以下の部活は、地域に移譲するっていう流れになってね」

茂木「それは本当に正しいですよ。うんうん、うん」

水島「そうだね。絶対に無理だね」

茂木「そうです」

水島「そう。私も教師の知り合い居るけど、全く同じことを言う。仕事、多過ぎる」

茂木「そう。だから、みなさん、頑張っている人達ですよ。頑張っているけど、はっきり言って（失笑）、やらなくいい仕事に頑張っている人なのでね」

水島「そうだよねえ」

茂木「寝る時間を削って」

水島「う～ん。その問題もそうだし、それと大谷さんの例で言うと、私は、あの井上尚弥というボクサーですね。彼も超天才ですよ。天才だけど努力も世界一。あれもチームですよ。やっぱり、みんな、一流の人は必ず私だけじゃないと。コーチや親や、みんなのお陰で今の僕が居ますって一流の人は必ず、それを言いますね。

大谷だって家族とかね、大事ですよ。あの犬の何とかっていうのまでお陰だっていうね、ある種のねえ、自分が伸びたのは努力が一番、人一倍しているけど、自分の才能だけじゃなくて、みんなのお陰っていうのは凄く感じてねえ、大谷の評判いいのも井上尚弥の評判がいいのも、もっと言えばイチローもそうだったんだけど、やっぱり自分一人でやったんじゃないって、自負はあるかも分かんないけど、建て前でも、みんな、井上尚弥の横に居るセカンドは親父ですからね。実の親がやっているっていうねえ。

だから、やっぱりチームで何か一つ、スターは居るけれども、周りでこうやって支えて、一緒に喜びを感じる。一緒に戦い、一緒に勝ったり負けたりね、幸せを感じるっていう尺度が、さっき、おっしゃった通り、その中で実現する。一人だけ努力して、だから、あの昭和の頃もね、巨人の星なんていうのは、とんでもない親父だけど、だけど、あれは、やっぱり…」

下村「今だったら放映できないかもしれないけど、まあ、しかし、ああいう親が居たからこそねえ」

水島「そうそう。だから、あれは姉さんと、とんでもない親父とね」

下村「うん。星一徹ですね」

水島「星飛雄馬を支えるみたいなね。ああいう感じの、スポーツものというのは結構、あったですね。だから、少なくとも家族とか、そういうようなチームでね」

下村「大谷翔平は、家族と花巻東高校が良かったんですよね」

水島「ああ、そうですね。あれもそうですね」

下村「花巻東高校の佐々木監督が人生計画、人生曼荼羅ですね。ただ野球選手として一流になるだけじゃなくて、非認知能力を育む為に、大谷翔平のつくったのが、今、小学校5年生の道徳の教科書の中に入っているんですけども」

高橋「はい、なっていますね」

下村「それは、例えば、履物なら靴はちゃんと揃えるとか。親に挨拶するとか。或いは、週に何冊の本を読むとかいうことを含めて、トータル的な自分の人生に於ける目標を作っ

ていて、それをトータル的には1人じゃできないから…」

高橋「はい、はい」

下村「やっぱり野球部で、佐々木監督が相当、指導して、育て、今、花巻東の野球部だけじゃなくて花巻東高校全体で、生徒にそういう人生プログラムを作ってやっていますけどね。まあ、そういう環境って大切だね」

高橋「その基本には、森信三先生の躰の三原則という挨拶、返事、整理整頓という、これは、やっぱり日本を取り戻すとすれば、大事な日本の教育の柱ですがね。挨拶、返事、整理整頓」

水島「うん」

高橋「そういうところが、実は大谷を育てているという基本のところだね」

水島「そうですねえ。それと、さっき言ったカークさんもね、敬虔なクリスチャンで、それで、そういうのを支える人達が勿論、奥さんも居たけれども、そういうグループで、彼を英雄というかヒーローを創っているっていうね」

掛谷「そうです。ターニングポイント・USAも、かっちリスタッフが居ますからね」

水島「そういう意味では、孤立した人ばかり、寂しい女や寂しい男ばかりつくっても駄目なので、やっぱり最後は自分でやらなきゃいけないけども、支える共同体や家族っていうのが居ないといけないと。

前に私は、フジテレビの90分ドラマで自殺した男の子を扱った学校もののドラマの脚本を書いたことがあって、その時、最初に言ったのは、あの子はとても寂しかったと。誰にも相談できなかった。学校に抗議した親に対して、私は何か違和感を持った。何故、貴方のところへ、お母さん、助けてとか、おとっつあん、助けて下さいって、これは残酷な話だから言い難かったけど、そういうところまで…。だから誰も助けてって言える人が居ない子供が今、増えているんじゃないかと。東横キッズなんかを見るとねえ、ほんとに、そういう感じがするんだよね」

近藤「私、寂しさっていうのは物理的に友達が居ないとか、そういう寂しさじゃないんですよ。遠藤利彦先生はアタッチメント理論というのを、日本でも一生懸命、広めていらっしゃる先生ですけども、そのアタッチメントって、日本語で言うと愛着ですね。じゃあ、愛着って何かって言うと、大人でも不安に思うことや恐怖に思うことってありますよね。私は、よく色々な所で例えて使っているのが、お化け屋敷に行った時とか、ジェットコースターに乗った時とかに、ちょっと気持ちがマイナスの方向に行きますね。

怖い、不安、どうしよう、ドキドキっていう時に、恋人であったり配偶者であったり、友達であったりの手を握ったり、身体と身体をスキンシップした時に落ち着く気持ち、実際、これが本当はアタッチメントですね。これが愛着であると。この自分の気持ちがマイナス、不安、怖いっていう方に行く時に、戻って来られる心の力が、この寂しさを軽減させると思うんですね。

遠藤利彦先生も、そのようにおっしゃっていますし、じゃあ、これを何処で養うのかと言うと、やっぱり、それはお母さんと子供ですよ。3歳までに、このアタッチメント、何か

怖いな、不安だな、心配だなあっていう時に、あっ、お母さんが励ましてくれているとか、おうちに帰ったらお母さんが居るからっていう、このレジリエンス、回復力ですね。

これを持たずに10代を迎えたり、ハイティーン、10代後半になったりした子が、寂しい、不安、どうしよう。そこにお母さん、お父さんでもいいですよ。誰でもいいけど、いつでも心の中で寄り添える他者が居ないんですね」

水島「そうだよねえ」

近藤「なので、東横へ行って、いや、グリコ下でも天神橋下とかでもいいですけど、そういう所へ行って、自分と同じ境遇じゃないけれども、何か苦しいんだ、寂しいんだ、言葉に表せない気持ちを共有できる誰かが居るとか、あとは、父親との関係性が上手くいっていない女の子っていうのは、やっぱり父親に似た年上の男性に行きがちなんですね。肌のスキンシップを通して感じられなかった父親とのぬくもりっていうのを男性に求めてしまう傾向が女の子にありますし、逆のパターンもあるんですね。幼少期にお母さんと、しっかりと肌と肌の触れ合いを感じる事の出来なかった男の子は、青年期になると女性の方へ行ってしまう」

水島「うん」

近藤「その稚拙な性欲の発散っていうことになってしまう。例えば、盗撮とかもそうですね。年上の女性に向かわず、幼い女性に向かってしまう青年達の生育歴というものを、私は、もっと、じっくり見ていく必要があると思うし、最近の報道だと、こういった性的な依存症になるのを、病気として治療していく必要があるんだっていうような報道を見ましたけれども、これは病気じゃなくて育て方だと、私は思っています」

水島「うん」

近藤「だから、もう一度、アタッチメントということ、しっかりと、その考え方自体、とっても欧米的なので、愛着、抱っこして育てましょうという日本古来の子育て風景を取り戻して、思い出していくとか必要だと思いますし、あと大谷翔平選手だって井上尚弥選手だって、その特別な誰か、特別な人っていうのを勿論、お手本として、この大スターをつかってきた教育は何があるんだって見ていることも大事だけれども、私はもっと普通の子達、その突出した人物も必要だけれども、そこまで突出しなくても、普通に平均値で、先程、掛谷先生のグラフにありましたけれども、平均値の青年達、大人達を増やしていく為の教育っていうのを考えて行くべきだと思うんですね。

既にシステムというよりも、非認知能力っていうのも、じゃあ、何処で非認知能力を見つけて育ててあげるかって言うと、やっぱり、おうちが一番、適切だと思っているんだけど、そのおうちが今、崩壊している機能不全家庭が増えているところに、やっぱり、もっとアプローチしていけるような国会議員とか、制度設計というよりも、学問で子育ては出来ない、よく松居和先生がおっしゃっているんですけど、学問じゃない何かもっと心に寄り添っていくところ、だから、それが心の余裕を生む為の、経済的な支援が必要であるならば、そういうことをしていけばいいと思っていますし、性教育もね、私はりっしんべんの性ではなくて生きていく心という意味の生教育に、もっとフォーカスしていくべきだと思っています、それが道徳だと思うんですね」

水島「う～ん」

近藤「だから、そういったことを考えられる、例えばインフルエンサーが増えて欲しいと思いますし、若い子達が動画とかSNSを見て、日本って素晴らしい国じゃないか、靖國へ行こうとか、知覧へ行こうって思ったのと同じように、心の部分、日本人としての価値観というのを、もっとSNSとか動画で広めていくにはそういったインフルエンサーが必要になって来ますし、だから、そういった所に何か社会の意識が向いてくれるんだと思いますね」

水島「そうだよねえ」

下村「私は、やっぱり家庭教育っていうのは凄く大切だと思うんだけど、国が何か言うと国家統制教育だとか言われるんですよ」

水島「ああ、そうですねえ」

下村「あとね、確かに子供が家に帰った時にお母さんが居て安心出来るとかね、出来るだけ家庭に居た方がいいと言うのは、その通りだけど、でも、じゃあ、今、若いお母さん方が、ちゃんと子育て出来るような、そもそも親世代が、そういう教育なり、或いは家庭で育ったかって言うと、親も孤育」

近藤「そうなんです」

下村「孤育でね」

近藤「そうなんです」

下村「我が子を、どう育てていいか判らない」

水島「そう、鍵っ子だからね。うん」

下村「どう接していいか判らないという部分があるから、本当に必要な親に対してはね、何らかのさっきの親学と言うと批判されるかもしれない、親業というかね」

水島「うん」

下村「やっぱり、そういうフォロー体制をつくることによって、安心して子育てが出来るような、非認知能力を含めて、そういう社会環境も同時にどうつくっていくかと」

近藤「うん」

下村「だから勿論、選択でね、専業主婦をやりたいっていう人は、それはそれでいいんですよ。ただ、やっぱり、今、共働きでないと食っていけない、或いは女性活用の時代でもあるから、共働きをしても、しかし家庭教育についても、もっと法的に親がどう子供を育てていいかっていうことについて、やっぱり社会的にきちっとフォローアップする体制をつくらないと、育てられないと」

近藤「そうですね」

下村「相談する人が居ないと。そういう親に対して、どの様に、その親にあったニーズを整備するかっていうのも、凄く大切な事だと思うんですよ」

近藤「それこそ、例えば学校教育の中に保健体育ってありますねえ。だから保健体育の中に子育てに関するものを入れるとか、道徳の中でも親になる心構えというのも勿論、あり

ますし、今、現在も既に幼い子供を抱えている20代後半とか30代の今の親ですね。今の親に対しては、例えば今日の高市さんの会見の中で家政師という国家資格を前提としたというお話があったんですね。ここを、私は文字おこしをして来たんですけども、その家政師というのが、家に政治の政、家政学部の家政をあてるのか、ちょっと私は会見自体にテロップがついていなかったので分らないんですけども、例えばこういった国家資格化の制度をつくれればいいという訳じゃないですが、今、現在、子供を育てている、特に男性も育児休業っていうのを、もっと取りましょうという風に企業でもやっていますけれども、若い両親に対して社会がどういう風に関わっていくかっていう時に、例えば、今の若い親達が、一人っ子であるとか少子化の中でも既に生まれ育って来ているから、子供との関わりが判らないにしても、まず親って生きていますよね。

この親の親ですよ。それこそ今の60代とか。だから三世代で、もっと関わっていくとか、そういう住宅を建てることに対して企業や自治体が助成金を出すとか、前向きな方に行けばいいのにといい風に私は思っているんですよ。そのお爺ちゃん、お婆ちゃんが居て、お父さん、お母さんが居て子供が居る中で、ここのお父さん、お母さんは仕事をしないと。それでお爺ちゃんとお婆ちゃんも仕事をしている…」

下村「まあ、そういうのは、あのう…」

近藤「まあ、居るでしょうけれども…」

下村「福井県とか北陸方面では比較的三世代も含めてね、率が高いところは幸福度も高いけど、でも東京で三世代に戻すなんて不可能ですよ。」

近藤「ああ、まず、そうですね、土地とか住宅の問題もありますね」

下村「はいはい」

近藤「だから、それこそ、まあ、これを言うと批判されるかもしれないけれども、その若い子達が都心を目指して進学して来るという考え方も、少し立ち止まって考えた方がいいと思うんですよ」

下村「まあ、地方では就職先がないから」

近藤「だから地元で就職先を作る為、例えば、萩生田先生がやっておられるような、地元と企業、学校教育も入れてやっていきたいと思いますよね。熊本とかでもそうだと思うんですけども、そういうのを、もう、ちょっと自治体で考えて…」

下村「いや、熊本は特別でTSMCがあるからでね」

近藤「ええ、そうです。そうですけども…」

水島「ただ茂木さんがさっき言ったように、忙しくて教育が出来ないっていうようなリアルな話で言うと、これこそ我々が今、直ぐにやらなきゃいけないことじゃないですか。そうしたら、例えば、これはどうですか。前に出た話で、今、お母さんが子供を保育所に入れると、国の費用が三十数万円がかかるらしいんですよ」

近藤「うんうん、うん」

水島「でも、それを1人15万円ずつお母さんにあげて、家の中で家事と子育てに専念す

るようにしたら、半額の15万円で済むし、産んで育てるってなって、小学校迄はずうっと、こういう補助が出来ますよと。保育所に30万出すんだったら、直接、女性に15万円渡して、ちゃんと育てて下さいというようなことも出来るんじゃないのと」

近藤「あっ、そっちの方がいいと思いますね」

水島「え？」

下村「いや、ただね、それは財政的には、その通りですよ」

水島「はい」

下村「じゃあ、さっき言ったようにね、その若いお母さんが家庭で子育てが出来るかって言うと、親がそういう教育を受けていないから出来ない」

水島「それでね、おっしゃる通りですよ、だから…」

近藤「家庭支援センターとかでねえ」

水島「例えば、多摩ニュータウンの話であつたんですよ」

下村「うん」

水島「もう老人が居なくなっちゃってね、そうしたら上の方には安いお金で、若い人が夫婦で入って、1階部分は老人が住んでお互いに助け合って、ノウハウや昼間の子供の見守りね」

下村「はい、はい」

水島「こういうことを共同でやっていく。或いはお母さん同士が、例えば月に15万円を貰えるなら、5万円ずつを出し合って、ある場所でね、公園とかで、ある人を見守りとかで雇うということも出来ますよね。お爺ちゃん、お婆ちゃんでもいい訳ですよ。子供に対して優しい人達というような共同制を創ってく形で、子供も三世代を知ることが出来るし、あのお爺ちゃんは死んだよってなるとね、死も解るし、生きることも解る。こういったことと赤ん坊のことも解るといふねえ、こういうように具体的な形でやらなきゃいけないと思ってるんですよ。それで、さっき言った…」

下村「それは非常に重要な事だと思う。新たなコミュニティっていうか共同体を作っていくことですね」

水島「そう。そういうことですね。前向きに行かないとね」

下村「そうですね」

水島「やっぱり中々ねえ」

近藤「それが出来ない理由ばかりおっしゃる政治家の方がいらっしゃるけれども」

水島「うん、そうですね」

近藤「出来ない理由は、もういいんですよ。出来る方向を考えて欲しいんですよね」

水島「だから、さっき言ったようにねえ、本当にちゃんと分けた方がいいと思う」

近藤「うん」

水島「教育で知識を植え込む人と」

近藤「うん」

水島「だって、それだって熱心にやってね。勉強の喜びとか学ぶことの喜びって教えられるじゃないですか。でも他の部分の仕事は、専門家の教師に委ねた方が私はいいと思う。だって若い二十いくつの未だ青年が、人生だ何だなんてやるのは難しいから」

近藤「そう。だからかつて知識というのは、学校の先生達が担当して、その心の部分ですよね」

水島「そうそう、そう、心の部分はベテランの定年退職した人でも雇うとかね」

近藤「心の部分は、家庭が担っていたのに、それも全部、何か学校に丸投げになっちゃっていますから（笑）」

水島「何かねえ、もうちょっと工夫できる感じ…」

高橋「一つ、実際にある例としては、神社。神社で母親達が、例えば日本の神話を勉強しながら、そこに子供が参加しているというのが段々増えているという実態もあるんですね。実は江戸時代、渡辺京二が『逝きし世の面影』の中で日本の赤ちゃん、子供は世界一幸せだったと言ったのは、家族だけではなくて地域の繋がり、つまり、共同体の中で、みんなが子供を大事に育ててきたということがあった訳ですね。現代に於いては、それをどうやって蘇らせるかという時に、やっぱり一つの拠点は、神社でなくてもいいんですけど」

水島「いや、神社、いいですよねえ」

高橋「うん。神社は大事な拠点になれると思うんです」

水島「うん」

高橋「だから僕の妹は、そこで神話の教室をやっているんですけど、お母さん達が沢山、どんどん来るらしいですよ。神話というものを通して子育てを考えるというね、そこを今に繋げないと意味が無いんですけど。凄く集まって来る」

水島「うん」

高橋「そうすると、そういう中で新しい共同体が出来て、一緒に育てて行くという場をどう創るかというのが一つと」

水島「うん」

高橋「それから、やはり今、結婚は面倒臭いっていう若者がどんどん増えて来たし、僕のゼミでも4割以上が面倒臭いと。やっぱり結婚とか出産とか、そういうこと自体に対する価値観ですよ。やはり、それが否定的に行われている面があるから、どうしても結婚をしたいと思う頃には一定の年齢になってしまっているということ、まあ、少子化の問題もお話にありましたけど、参政党の教育政策を見ていたら、女性活躍推進法に専業主婦支援を追加するとありました。

或いは、将来の夢はお母さんという価値観を取り戻すってというのがあったんですけど、或いは3年間は育児に専念する長期育児休業を奨励するとか、地域という共同体で子育て家族を支える制度を強化するとか。やっぱり、こういうことの具体化が必要になって来ているのかなあと。僕は男女共同参画会議の議員の時、男女共同参画で月刊誌に巻頭言を書いた訳です」

水島「うん」

高橋「その時に『典型的家族』という言葉は、松田茂樹という中京大学の先生が、政府の少子化対策のリーダーだった江藤晟一さんがやっておられた時、この方の文章、少子化論とかいう本の中から引用して『典型的家族』というのを使ったんです。意味は、その当時のことですけど、3歳までは子供を家庭で育てたいというお母さんが多いと。

それを『典型的家族』と言った訳です。僕が、それを引用する形で載せたら、男女共同参画から電話がかかって来て、削除してくれと。ええ一つ、これは松田さんの本の引用ですよと。僕の造語じゃないよと。引用したものを削除する訳にはいかないと言って突っ撥ねたんだけど、結局、『典型的家族』という言葉が、やっぱり抵抗している訳ですよ

水島「そういう流れが、本当に…」

高橋「男女共同参画局としてはね。ですから、そういう風潮がどうしてもあるから、それがフェミニズムの教育が今、教科書にもどんどん入って来ている。大学の教育にもどんどん入って来て、特に女性達にも影響を与える、男性にも影響を与え始めて、勿論、固定できない役割分担っていうものが極端なものは排除しなくちゃいけないけど、男らしさ女らしさ、そのものを危険視したり、男のくせに女のくせにと言いきたらいけない。やっぱり極端がいけないんで」

水島「うん」

高橋「その本来の男らしさ、女らしさというものも、僕は父性原理、母性原理と言いますが、壁になるってことが子供が成長する上で必要なので、それが封建的だと言われちゃうと、家庭教育の意義が…」

下村「その男らしさ、女らしさっていうのは、書けないんじゃないかなあ」

水島「ああ、そうなんですか」

下村「恐らく教科書ではね」

高橋「ああ、書けないでしょうねえ。差別だっていう」

下村「うんうん」

高橋「だから、これはねえ…」

水島「うん。馬鹿げた由々しきことでねえ、思い切ってやって行かないと駄目ですね」

下村「そうですね」

高橋「ここをはっきりさせないと、混乱が続いちゃっているんですよ」

水島「ちょっとトランプ的に強引でもね」

下村「うん」

水島「例外はあるけども、男と女しか世の中に無いんだっていう言い方ね」

下村「特にカリフォルニア州なんかは、性は男と女以外に20種類ぐらいに分類できると」

水島「うん」

下村「LGBTQ以外に」

水島「うん」

下村「という具合に、どんどん分化しちゃって、それが何かいいことみたいな、それは、もう極端過ぎて異常ですよ」

水島「そうですね」

下村「だからトランプが男と女しか居ないっていうのは大統領令で書きちゃっているけど、逆にその部分については、ちゃんと真面に戻る」

水島「いやあ、だから…」

下村「そういう事例になって来るっていうのを期待しますけど」

水島「日本人は物凄く大らかですもんね」

下村「う～ん、昔からね」

水島「だから、いつも言いますが、弥二さん喜多さんだってホモですから。そして宿場毎に女を買って、あれはバイですよ。西鶴だろうと上田秋成の『雨月物語』だろうと、みんな、ホモ話がメチャクチャ多い訳ですよ。葉隠れの恋というのは実際、男同士の恋ですからね。だから日本人はそういうのが、あまり無いのに、態々法律を作って規制するっていうのは、返って差別意識を生むと思いますよ。

変わった人は保護してやらなきゃいけないとかね。そうじゃなくて自由に生かしてやればいいんでねえ、日本にあった通りに。私は、そういう意味での、もっと具体的に苦しんでいる教師や苦しんでいる母親とか苦しんでいる親父というのを、もうちょっと救ってやる、さっき言った問題も、ねえ、あんどうさん、経済政策の問題もありますよね」

あんどう「ああ、それは大いにあると思います」

水島「ねえ」

あんどう「今、女性も働きに出ていますけど、結局、労働力不足だから、女性とか高齢者をどんどん働くようにしてっている訳ですよ。それに加えて、男女平等と言って賃金も同じにしようとしていますけれども、結果的に男の給料が下がった訳ですよ」

水島「うん」

あんどう「低い方に合わさった訳ですよ」

水島「うん」

あんど「なので、女性、子供、奥さん、子供が養えなくなって共働きにならなきゃいけないっていったという、これも悪循環なので、その考え方自体も改めてですねえ…」

水島「そうですねえ」

あんど「ええ。やはり社会としても、それは嫁さん子供を食べさせられるだけの給料を払わなきゃいけないよねって、経営者側もそういう風に発想を変えて貰った方がいいし」

水島「基本が、そういう認識から出発しないとね」

あんど「そう。それが日本型経営で駄目なんだとかって言われて来たけれども、結局、これが少子化を生んでいるし、女性に物凄く負担を強いている訳ですよ。だから女性も働きたい人は働いてね。働きたい人は働いてくれたらいいし、家で子育てをしたいっていう人は子育てしてほしいっていい。

でも、やっぱり子供と二人で家に居たらしんどいから、保育園に3時間ぐらいは預けられますよと。そこで保育士さんと…」

水島「デイケアみたいなものだね」

あんど「コミュニケーションをとって、悩みを聞いてくれる保育園みたいなね、そういう立場でつくっていけば多分、おっしゃるような子育てをしたことがない親も、そこで相談相手が居れば未だ何とかなるし、安心できるんじゃないですかね」

近藤「そこで保育園でなくても、神社での集まりとかでもいいですからね」

水島「そうですね。デイケアみたいな老人に対するケアも出来るし、子供の三世代的なね」

近藤「うん」

水島「教育というか、それから仲間だっていう意識を子供にね、独りぼっちじゃない家族だけじゃないんだとかね」

近藤「そうなんですよ。だから子供達が外で遊べなくなってきているっていうのが、ありますからね」

水島「こういうものが意識としてねえ、お祭りでもやったら、必ず共同意識で出来るから…、それと茂木さんは凄く忙しい方だけど、先生の時は相当、忙しかったんですか」

茂木「忙しかったですね（失笑）」

一同「（苦笑）」

水島「いやいや（笑）」

茂木「僕は、とにかく授業の準備をしたかったんですよ」

水島「うん」

茂木「だから、ほぼ毎日、最後に用務員さんが鍵を閉める迄、やっていましたね」

水島「ああ、なるほどねえ」

茂木「ええ」

水島「だから働くことは嫌いじゃないけども、限界がありますよね」

茂木「ええ、そうですね…」

下村「今、中学校の教員の残業、時間外労働は70時間を超えて、これは、もう、過労死の直前ですけども…」

水島「うん」

下村「それが、ほんと70%ぐらい居ますから」

水島「ああ」

下村「もう大変ですよ。だから、みんな、好きでやっているんだけど、もう、これ以上、先生任せじゃ、本当に、なり手も居なくなるし、学校現場が崩壊しちゃいますよね」

水島「だからね、その話で、私も働くのは意外と好きでね、だからトラックの運転手が、これ以上、いけないとか、ああいうのはやめて貰いたいっていうね。というのは、拒否する事は出来ると。だけど、もうちょっと働きたいっていう人は、1時間や2時間オーバーしても働かせてあげて貰いたいなあと、私なんかは、あのう…」

下村「今、だから本業以外に副業という形でね…」

水島「ああ、やっています、そうですねえ、ええ」

下村「事実上は、するようにしますけどね、まあ、労働時間は労働時間で守らなくちゃいけないっていうのがあるから」

水島「それと移民の問題は、単なる労働力の不足だけが一応、表面になっているけど、現実には、この間のアフリカ会議の問題とか色々あって、つまり外国人を沢山入れて、消費する人達を増やしていく、つまり単なる労働力不足の解消じゃなくて、日本自体をそういう国にしていっちゃうっていう目的があるんじゃないかっていう気がするんですけど、これは、ちょっと考え過ぎですかね」

掛谷「私は日本を壊す為に、戦略的にやっていると思いますよ」

水島「そうそう。それが…」

掛谷「それが目的だと思いますよ。アメリカの左翼運動もそうですから。結局、左翼運動というのは自分の国を壊すっていう、だから何故、壊したいと思うかって言うと、これは私の分析ですけど、左翼っていうのは自分の上が無くて、自分が神になりたい訳ですね。自分が一番、偉いと。だけど世の中は、それを認めないじゃないですか。そうすると、世の中を憎むようになって、自分が属する社会を潰したいというのが、アメリカの左翼もそうだし、日本の左翼もそうですね」

水島「うん。全くそうだね」

掛谷「だから基本的に、彼らは社会を潰したい人達ですよ」

水島「一貫してそうだよ」

掛谷「うん」

水島「まあ、というようなことで、今日は、色々教育の問題っていうのは、本当に根本の問題から具体的な問題から色々和多岐に渡っちゃうんですけども、全部、繋がっているということですね」

近藤「すみません、ちょっと最後にそもそも論過ぎて、こう…」

水島「はい？」

近藤「そもそもの話で多分、皆さん、何かズコっとなるかもしれないんですけども」

水島「ああ、今、最後に一言ずつ貰おうと思っていますけど、はい」

近藤「まず『教育が衰亡日本を救う』とありますけど、じゃあ、教育ってそもそも何なんだと」

水島「うん」

近藤「この教育っていう主語が大きいだけに、色んな話が、今日もそうですけど、じゃあ、学校教育だとか、いや、家庭教育だ、いや、経済でとか何とかでと。だから教育って、じゃあ、何なんだっていうところから、もう一回、定義し直すっていうのも、これから必要だと思うし」

水島「そうですね」

近藤「あと、教育って言うと、常に小学校からの話になるんですね。義務教育は小中だから。でも、そうじゃない、幼児教育、幼稚園。幼児教育っていうものも、もう今、凄く左傾化しているんですよ」

水島「ああ、そうですね」

近藤「ええ。幼児教育、まあ、幼稚園ですね。でも保育園っていうのは、児童福祉の施設なので、そもそも保育園では本来、幼児教育っていうのを…」

水島「うん」

近藤「幼児教育は文科省ですから幼稚園ですね。じゃあ、保育園でいいじゃないかみたいになってくると、保育園も今、子供園とか幼稚園と保育園を合併させたような保育、子供園っていうのがありますけど、じゃあ、その保育園で独自の教育っていうのがあるのか無いのかっていうところも、しっかり見て行かないといけないし」

水島「そうですね」

近藤「左傾化している幼児教育というのを、ちゃんと正しい日本古来の考え方に戻さないといけないしということで、家庭教育もありますね。だから教育というものを、もう一度、何だっていう定義付けをしていかないと、この言葉に惑わされて、親も政治家も関係者も、大人が、みんな惑わされていってしまうと思うので、是非、教育とは何なのかということ、もう一度、考えて行くということをやりたいと思います。特に文科省ですよ。厚生労働省もそうですけども」

水島「そうですね」

近藤「はい」

水島「さっき下村さんから、教育改革省みたいなものをね…」

下村「うん、はいはい」

水島「別に作った方がいいという…」

下村「ええ」

水島「本当にねえ、潰した方が一番、いいと思いますけど、そう簡単にいかないならね」

下村「まあ」

水島「そういうようなね」

下村「アメリカでもね」

水島「うん」

下村「教育省を無くすって話があるぐらいでね」

水島「うん」

下村「やっぱりねえ、今迄の既存の、価値観はいいですよ」

水島「うん」

下村「ただ、教育システムそのものはね、もう、これから通用しなくなりますよ」

水島「そうだね」

下村「私は、さっきの教育は何の為にあるのかって言ったら 一人一人が幸せになる為に教育があると」

水島「うん」

下村「一人一人が幸せになると」

水島「うん」

下村「じゃあ、本当に戦後80年、日々幸せになっているかって言ったら、主観的には、ともかくとして、しかし客観的に見ると、どんどん不登校が増えたり色々な問題が出て来たりして、その教育が時代の変化に対応できていない、或いは、していないと、まあ、それを考えた時に、今迄のシステムの延長線上でない教育の在り方っていうのを考えて行く必要があると思いますので…」

水島「そうですね」

下村「それが本質だけど、でも戦後80年っていうのはチャンスだと思います」

水島「そうだね」

下村「今迄の捉われね、自虐史観も含めてGHQ史観から、或いは、東京裁判史観から、

もう解放されるべきで、だから若い人達は捉われない人達も沢山、増えている訳だから、この戦後80年っていうのはチャンスだと捉えて、正に日本が滅亡衰退化する直前に、教育によって一人一人が覚醒するようなことが是非、出来るんじゃないかと思えますね」

水島「そうですね」

高橋「私も、ちょっといいですか」

水島「ああ、纏めになりますから、はい、どうぞ」

高橋「自己実現という言葉がね、僕は一番、大事なキーワードだと思っていまして、本来の自分を自覚して実現していくと。その為には、最初、僕は、親学とか師範塾というのを創ったのは、教師と親が日本を変えるという本をPHPからみんなを出して、まず、大人が変わることだと。子供を変えよう、変えようとする子供は変わらないと。まず親が変わる。教師が変わる、大人が変わることだと。それで自治省で、僕は青少年健全育成調査委員会の座長を引き受けた時も、自治省の方に、それだけ条件を申し上げて、青少年健全育成という言葉は胡散臭いと、大人が健全で子供は不健全という前提は間違っていると」

水島「うん」

高橋「大人がどうやって健全になるかを、まず考えないといけないと。それで主体変容、自分が変わる、心のコップを上に向けると、ずうっと言って来たんですが、最近、それだけじゃ駄目だと。共に変わるというものをどうつくっていくか」

水島「そうですね」

高橋「親も子も地域社会も、みんな、まあ、社会は会社もね、みんなが共に地域も変わるというシステムを一方で創っていく。意識改革と、そういう多様な、共に変わるシステムをどうつくっていくかという、新しい共同体と言ってもいいんですけど」

水島「そうですね」

高橋「そういうものが求められているのかなあという風に私は感じています。はい」

水島「はい、有難うございます。じゃあ、纏めで、あんどうさん、お願いします」

あんどう「はい、二つ申し上げたいと思いますけれども、やはり今日の教育の話で一番、大事なのは子供の頃からの非認知能力っていう話も出ましたけれども、子供にお母さんを返してあげたいっていうことですよ、まず一番、大事なことはね」

水島「ああ。うん、ああ、そうねえ」

あんどう「はい。やっぱり、これが無かったら、自己肯定感のある子供って中々育たないと思うし、いつでも抱きしめてくれる存在が居るんだっていう、やっぱり、それが、自分は生きていて良かったなあというところの一番、基礎になると思うんですよ」

水島「うん」

あんどう「子供が小さい時は、さっきも言いましたけれども1日、どれだけ楽しかったか。楽しい一日を過ごせたかなど。ああ、今日は楽しかったなって寝られる子供がどれだけ居るかっていうので、国力って凄く変わると思うんですよ」

水島「ああああ。うん」

あんどう「ああ今日も一日楽しかったなあ。明日は何をやって遊ぼうかなあっていうね」

水島「うんうん」

あんどう「そういう子供が多かったら多分、日本の教育は良くなるんじゃないかなって、凄く国力がつくんじゃないかと。それが一つと、もう一つは学校教育の中で大事なことは、日本語をもっと大事にして欲しいってことです。日本語をもっともって凄く使えるようになって、やはり言葉というものが人格を創りますから、美しい言葉、格調高い言葉を学校できちんと教える。

やっぱり、それには古典とか、或いは、文学もそうだし、文語的な表現もそうだと思いますけれども、今、そういうものが非常にないがしろになっていると思うし、日本語よりも英語だあみたいな感じになっているけれども、その前に、やっぱり日本人なんだから日本語を大事にして、日本語で物事がきちんと考えられて、その上で外国語っていう、この順番を守らないと、恐らく日本の教育は崩壊していくと思いますので、その2点を強調しておきたいと思います」

水島「そうですね。丁度、島崎藤村あたりまでが文語詩で、あと、口語詩に変わっていくっていうね、そうすると、そこまでは色んな和歌などを朗読していたってね。ところが口語体の詩になってから、声に出して言う人達が居なくなった。つまり日本の古典っていうのは、意外と五七五七七とかリズムがあるから、本当は朗読っていうのは凄く大事だけど、学校でも中々無くなって来たっていうかね」

あんどう「そうですね」

水島「はい。そういう意味では、日本語の教育の衰退っていうのは、比例しているというところもあるかも分かんないですね。はい。茂木さん、お願いします」

茂木「はい。最近、若い小学校の先生だった方から連絡を戴きまして、その小学校で自分は社会科を6年生に教える時に、昔の立派な日本人の事を偉人伝的に教えていて、子供達に凄く喜ばれたそうですよ。ところが親からクレームが入って、それで教科書通りやってくれということで校長に睨まれて、校長先生が毎時間、その先生の授業を観に来ると言うんですよ」

水島「ああ、それは凄いね（苦笑）」

茂木「それで、結局、担任も外されちゃったので、もう、ここに居てもしょうがないってことで、その職を辞められて、今は寺子屋をやっていると」

一同「(笑)」

茂木「お寺を借りて寺子屋をやって、大人から子供まで集めて、正にこういう昔の教科書とか、あとは江戸時代の寺子屋の教科書、童子教とかを教えていると。今は、本当に生き生きされているので」

水島「なるほどねえ」

茂木「まあ、こういうことを正に草莽崛起で、勝手にやりましょう、皆さん」

一同「(笑)」

茂木「政治は変わらないから、うん。という風に、私は思います。先程、高橋先生から、神社でお母さん達が神話を学んでいるって」

高橋「はい」

茂木「これは素晴らしい事で、こういう波が広がって行ったら、自ずから教育は変わって行くということで、本当に今日はいいお話を有難うございました」

水島「場所と言うと、今、おっしゃったように神社が勿論、神話の教育、学ぶ場とデイケアとかね、もっと言うと、防災とか防犯とか何かで集まるコミュニティセンター的な形で機能していく。それから鎮守の森って緑があるじゃないですか、だから、こういうところに、子供達やお年寄りも安心して集まって時間を過ごせるようなものをやれたら、本当に凄いと。神話を学べば、俺達の国は凄い国だっていうね。何かそういうのが解ると思うんだよね。はい。有難うございます。まあ、さっき纏めをやったので」

近藤「ああ、はい」

水島「掛谷さんから、はい」

掛谷「えーと、先程、下村先生が生成AIの話をして、これは教育を劇的に変えますよ(笑)。あまり注目されていないみたいですけど、私自身は今、研究でプログラムを直すのに、本来であったら1か月ぐらいかかるようなものが、本当に二日ぐらいで、要するに間違えたところを全部、見つけてくれますし、英語の論文を書く時も全部、直してくれますし、そういうのを繰り返すとどんどんスキルアップにもなるんですね。多分、普通の勉強でもそうで、これは恐らくスキルの部分では、このAIが劇的に大きく変えてくれて、学校というインフラが果たして必要なのかどうかっていう時代になるかもしれません。

チャーリー・カークの話をしてしまいましたが、そもそも今迄のインスティテューショナルな組織というか、そういう機構としての学校っていうのが段々意味をなさなくなって、そういうもので勉強できる。それで従来为学校で勉強した人に勝てるっていう状況が起きて来ると思います。だけど、それは技術の部分はそのですけど、先程、日本の神社っていう話もありましたけど、アメリカの場合は、それが、だから教会であり聖書であり、キリスト教っていうのがあって、今、アメリカはそれに回帰しようとしている訳ですね。

日本って、その部分が仏教もあって、はっきりしないんですよ。神道もあって。私は、この番組に出る度に何度も必ず言うのが、日本人にとって、私は回帰するところは和歌だと思っているんですよ。

やはり日本語という話もありましたけど、先程、五七五七七っておっしゃいましたけど、やっぱり俳句甲子園とかあるんですけど、和歌はやらないんですよ。だけど第二次大戦で散華された特攻隊の方も素晴らしい和歌を残されていますよね。ただ現代人は和歌を詠む習慣が本当に無くなって、御所で歌会始がある時だけということ、私は最近、私のXのところで時々和歌を投稿しているんですけど(笑)」

水島「うん」

掛谷「未だ素人ですよ。ただ最近、自分の和歌もチャットGPTが色々添削してくれるん

ですよ。だから誰でも始められますから（笑）」

下村「それは優れているね」

掛谷「はい。私が色々書いたら、あのう…」

水島「添削までやるの？」

掛谷「ああ、ここを、こうしたらどうかとか色々言ってくれるんです」

水島「へえ～凄いね」

掛谷「だから、皆さん、今から直ぐ和歌を始められますので」

水島「そうかあ」

掛谷「是非、一度、チャンネル桜で歌会をやりましょうと」

水島「面白いねえ」

掛谷「前から提案しているんですけれども（笑）」

水島「例えばアララギ派的な短歌にしたいとか」

掛谷「はい」

水島「色々あるんだ」

掛谷「はい」

水島「言うことを聞いてくれるんだ」

下村「もう平均以上のレベルで出来るんですね」

水島「ねえ、凄いね」

掛谷「だから、私が書くと、ちょっと現代的な言葉を使っているけど、もっと、伝統的な言葉に替えたいですか、それとも現代風で行きますかとか」

水島「ああ、なるほどね」

掛谷「或いは、この部分はいいと思いますとか、この部分は、こうしたらどうですかって言ってくれるんですよ」

水島「それは面白いねえ」

掛谷「ですから、是非、和歌を詠んでチャットGPTに投げて（笑）」

水島「じゃあ、みんなで、それを使って発表しようか。ね」

掛谷「はいはい、是非」

水島「掛谷作ってという感じでね」

掛谷「最後、AIに添削して載いて、一番、いい賞を決めて貰う（笑）」

一同「(笑)」

掛谷「やっぱり日本人の心情を詠むっていうのは、和歌が日本人の伝統だと思うんですよ」

水島「なるほどね」

掛谷「私は日本人の心の教育は和歌を軸にすべきだっていうのが、まあ、理系の人間が、偉そうに言ってあれですけど、私は、ずうっとそう思っています。はい」

高橋「今、私の高橋塾の先生は、和歌を通して日本型ウェルビーイングを朗読教育で実践化しています」

掛谷「じゃあ、一度、和歌を勉強させて戴きます。私の下手くそな和歌を採点して戴いて、私も勉強したいと思いますね」

水島「我々は神武天皇以来、ずう〜っと皇室の方は全員、詩人ですからね」

掛谷「はい」

水島「歌人ですからね。凄い話ですよ」

掛谷「そう、それでねえ、はいはい」

水島「はい」

掛谷「私が何故、和歌になったかと言うと、さっき言った型に嵌めて教科書通りに教えをしないっていう話をしましたけど、私の高校の国語の先生が、3年持ち上がりで古事記から始まって万葉集、これを万葉仮名で教えるんですよ（笑）」

水島「はい」

掛谷「それで日本書紀から源氏物語まで、時代順に日本の古典を教えて行くっていうことをした先生でした」

水島「ああ、それはいいねえ」

掛谷「私はそこが自分のベースになっているんですよ。今、そういう教育はAIを使えば誰でも始められます（笑）」

水島「はい。理系でも岡潔さんとか湯川秀樹さんとかね」

掛谷「はい」

水島「本当に日本の心が解る人達が沢山居て、それで実績を上げているっていうね、掛谷さんも名歌を作って下さい」

掛谷「はい（笑）」

水島「お二人からは、さっき纏めをおっしゃったけど、何か一言、あれば」

下村「9時過ぎても大丈夫ですか」

水島「少しぐらいは大丈夫ですよ」

下村「ああ、そうですか。う～ん、やっぱりねえ、今、おっしゃったように、科学技術というか、AIとかね、教育が劇的に変わります。だから今迄の教育の延長は、もう数年で無くなりますよ」

水島「うん」

下村「ただ、その時でも学校は無くなりません。だから代替りの非認知能力なり、或いは人間的なコミュニケーション能力ですよ」

水島「そうですね」

下村「やっぱり一人では生きていけないから、いかに仲間とちゃんとコミュニケーションを取りながら人間力を高めて行くかっていうことで、質は変わっていきますね。ですから、画一均質的な教育は放っておいても変わっていきますよ」

水島「そうですね」

下村「時代の変化に対応できないから。だから今迄は、例えば飛び級とか落第とかいうのは、日本ではあり得ない話だったけど、やっぱり個別最適化教育っていうことであれば、アメリカでも優秀だったら何歳だって大学にも入れると」

水島「なれますね」

下村「日本もそういうのが自然になっていくことは、コミュニティとか人間を壊すところじゃなくて、個別最適化教育と…」

水島「みんなも、そういうのは応援しますよ」

下村「うん。それと、また新たなコミュニティ的なものと、別次元として、一人一人の能力を最大限に伸ばしながら、一方では、やっぱり基本的に人間は独りで生きていけないから、新たなコミュニティをどう創っていくかということをつとめていくと、日本社会が魅力的な国になると思いますけど」

水島「そうですね。だから幸せって何だろうっていう根本を、今言ったそういうツールを使って出来るようになるといいと思いますけど」

下村「そうですね」

水島「いいですか」

近藤「あっ」

水島「近藤さんも何か一言あれば」

近藤「あっ。じゃあ、ほんの一言だけ。教育勅語を思い出しましょうっていう（笑）」

水島「なるほど。はい」

高橋「和歌の話が出たので、私も一言だけ。私の父は毎日、和歌日誌をつけていて、僕は和歌でしか手紙を貰ったことが無いんです」

一同「（笑）」

高橋「自分の部屋を『敷島の間』と名付けて、母親も和歌を作るんですけど、認知症になりまして、もう私のことも全然、判らなくなっただんです。妻は判ったんですけど。僕の事は、この人、誰なのと言う。ええ～っ、僕のことを判らないのと。ところが和歌は作るんです。どういうことだろう。認知症になって、かなり重い認知症なのに、何故、和歌が出来るのと。ハワイに行った時も上の句は忘れましたが、老いも若きもワイキキの浜で、よく覚えている」

一同「ああ」

高橋「それで和歌って不思議だなあと思いました」

水島「いいですねえ、ええ」

高橋「まあ、ちょっと余計な話でした」

水島「せっかくなので私からも一言。お袋も下手な和歌をずうっと作ってしましてねえ、葉書で書いて来るんですよ。それで私が添削して返すと、凄く辛くなったみたいだけど（笑）、それでも、しぶとく送り続けて来たっていうね。やっぱり何かいい、思いがああいう形の、日本語に変えられるっていうのは、本当に我々の国の凄いところだと思います。それも天皇陛下から一般庶民まで、全員が出来るっていうのが凄い事だと思います」

46 掛谷「連歌をやってみたら、楽しいかもしれませんね」

水島「ああ、連歌もね。なるほど」

一同「(笑)」

下村「万葉集みたいなのはねえ、正に天皇陛下から読み人知らずとか…」

水島「はい、そうですね」

下村「当時で言えば、平民まで…」

水島「全部、居る訳ですからねえ」

下村「他の国じゃ、あり得ないでしょう」

水島「他の国じゃあ、あり得ないですね」

下村「うん」

水島「はい。ということで、今日は『教育は衰亡日本を救う』ということですけど、本当にちゃんとやれば救えるかも分からないという気持ちに、少しなって戴いたかも分からないってことです」

一同「(笑)」

水島「はい。困難は続きますけど、頑張りたいと思います。今日は、皆さん、有難うございます」

一同「有難うございました」

***** お わ り *****